

中 南 部 (3)

—那珂遺跡群第29次調査・麦野C遺跡群第1次調査報告—

1994

福岡市教育委員会

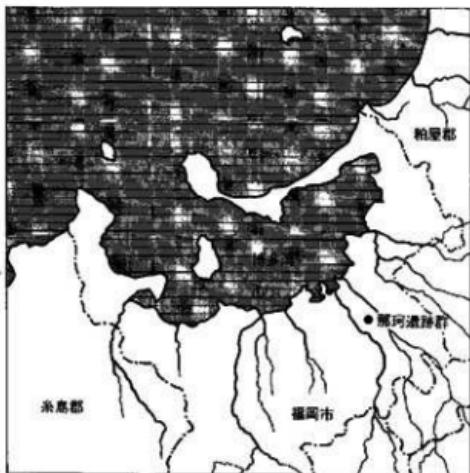
中 南 部 (3)

—那珂遺跡群第29次調査・麦野C遺跡群第1次調査報告—

1994

福岡市教育委員会

那珂遺跡群第29次調査



序

古くから大陸文化受窓の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの遺跡が分布しています。本市では、特に文化財の保護・活用に努めてきていますが、市内の都市基盤整備事業や各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書は、博多区東光寺町一丁目162～165番地の社屋ビル建設に先だって発掘調査を実施いたしました那珂遺跡群第29次調査と、博多区麦野六丁目11-4の共同住宅建設に先だって発掘調査を実施いたしました麦野C遺跡群の調査報告書です。

発掘調査の結果、那珂遺跡群第29次調査では古代から近世の井戸などの遺構が、麦野C遺跡群では古墳時代から古代の堅穴住居址などの遺構がそれぞれ検出され、貴重な資料を得ることができました。

福岡梶包株式会社、藤正憲氏をはじめとする関係各位のご協力に対し、感謝の意を表しますとともに、本書が文化財理解の一助となり広く活用されることを願っております。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例　　言

1. 本書は、博多区東光寺町一丁目162～165番地の福岡梶包株式会社による営業ビル建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、1990年8月に発掘調査を実施した那珂遺跡群第29次調査の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、山口謙治、菅波正人、牟田裕二、屋山洋、松岡大介、石本恭司、大塚恵治、岡崇が行なった。
3. 本書使用の遺物実測図は、平川敬治、丸丸陽子、太田明子が行なった。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口謙治、菅波正人が、遺物を平川敬治が行なった。
5. 本書使用の図面の製図は、山口謙治、太田明子、山口朱美が行なった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書の執筆および編集は、山口謙治が行なった。
8. 本調査の出土遺物および記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

I 序説

1. はじめに.....	1
2. 調査体制.....	1
3. 遺跡の位置と立地.....	3

II 調査の記録

1. 調査の概要.....	5
2. 遺構と出土遺物	
1) 土壌と出土遺物.....	6
2) 井戸と出土遺物.....	28
3) その他の遺構と出土遺物.....	36

III おわりに.....52

友野 C 遺跡群第 1 次調査報告本文目次.....52

挿 図 目 次

Fig. 1	那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡	
Fig. 2	那珂遺跡群調査地点位置図	2
Fig. 3	那珂遺跡群第29次調査全量	4
Fig. 4	那珂遺跡群第29次調査地点遺構配置図	5
Fig. 5	第3・4号土壤 (SK-03・04) 実測図	7
Fig. 6	第3号土壤完掘状態	8
Fig. 7	第4号土壤土師器出土状況	8
Fig. 8	第4号土壤完掘状態	8
Fig. 9	第3・4号土壤出土土師器実測図	9
Fig. 10	第3・4号土壤出土土師器	10
Fig. 11	第4号土壤出土土師器	12
Fig. 12	第7号土壤出土遺物(1)	12
Fig. 13	第7号土壤完掘状態	13
Fig. 14	第11号地下式横穴	13
Fig. 15	第7号土壤出土遺物実測図(1)	14
Fig. 16	第7号土壤出土遺物(2)	15
Fig. 17	第7号土壤出土遺物実測図(2)	16
Fig. 18	第7号土壤出土遺物(3)	17
Fig. 19	第7号土壤出土遺物実測図(3)	18
Fig. 20	第7号土壤出土遺物(4)	19
Fig. 21	第7号土壤出土遺物実測図(4)	19
Fig. 22	第7号土壤出土石鍋実測図	19
Fig. 23	第11号土壤 (SK-11) 実測図	20
Fig. 24	第13号土壤出土遺物実測図	20
Fig. 25	第13号土壤出土土師器	20
Fig. 26	第17・18号土壤出土遺物実測図	21
Fig. 27	第17・18号土壤出土遺物	21
Fig. 28	第19号土壤出土遺物実測図(1)	22
Fig. 29	第19号土壤出土遺物(1)	23
Fig. 30	第19号土壤出土遺物(2)	24

Fig. 31 第19号土壤出土遺物実測図(2).....	25
Fig. 32 第19号土壤出土遺物(3).....	26
Fig. 33 第19号土壤出土木製品実測図	27
Fig. 34 第19号土壤出土木製品	28
Fig. 35 第12号井戸桶出土状況	29
Fig. 36 第5号溝遺物出土状態	29
Fig. 37 第10・12号井戸(SE-10・12)実測図.....	30
Fig. 38 第10号井戸出土土鍋および第12号井戸出土遺物実測図	31
Fig. 39 第10号井戸出土土鍋	32
Fig. 40 第12号井戸出土遺物	32
Fig. 41 第12号井戸出土桶実測図	33
Fig. 42 第12号井戸出土桶	34
Fig. 43 第30号井戸出土木製品実測図	35
Fig. 44 第30号井戸出土木製品	36
Fig. 45 第5号溝出土遺物実測図(1).....	37
Fig. 46 第5号溝出土遺物実測図(2).....	38
Fig. 47 第5号溝出土遺物(1).....	39
Fig. 48 第5号溝出土遺物実測図(3).....	40
Fig. 49 第5号溝出土遺物(2).....	41
Fig. 50 第5号溝出土遺物実測図(4).....	42
Fig. 51 第15号溝出土遺物実測図	42
Fig. 52 第15号溝出土遺物	43
Fig. 53 各柱穴出土遺物実測図	43
Fig. 54 調査区東壁・南壁土層断面図	44
Fig. 55 各柱穴出土遺物	45
Fig. 56 谷部出土遺物(1)	45
Fig. 57 谷部出土遺物実測図(1).....	46
Fig. 58 谷部出土遺物実測図(2).....	47
Fig. 59 谷部出土遺物(2)	48
Fig. 60 出土石製品・土製品実測図(1).....	49
Fig. 61 出土石製品実測図(2).....	50
Fig. 62 出土土製品・石製品	51



1. 那珂遺跡群 2. 比恵遺跡群
 3. 博多遺跡群 4. 板付遺跡
 5. 高畠遺跡 6. 井尻遺跡
 7. 諸岡遺跡 8. 蜜袋遺跡

▽先土器時代	△縄文時代	▲弥生時代
●古墳時代	■古代	□中世

Fig. 1 那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡

I 序 説

1. はじめに

博多区東光寺町一丁目162~165番地に、福岡梶包株式会社による営業ビルの建設が計画された。この地は那珂遺跡群の北部に属し、比恵遺跡群に隣接している。営業ビル建設の計画者である福岡梶包株式会社より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）に埋蔵文化財事前審査願いが提出された（受付番号2-2-116）。

埋蔵文化財事前審査願いを受け、埋文課は那珂遺跡群に営業ビル計画地が所在していることから試掘調査実施を決定し、1990年7月13日に試掘調査を実施した。試掘調査は用途地に建物があったため、東側の空地で実施した。その結果、現地表下55cmで、鳥柄ロームを基盤とする井戸・柱穴・溝等の遺構が検出できた。また、須恵器・土師器・弥生土器が出土し、遺構は弥生時代から古墳時代後期のものと想定された。試掘結果と営業ビル計画地が那珂遺跡群北東端部に位置していることから、埋文課は引両地全域に弥生時代から古墳時代の遺構が遺存しているとし、地下牢がある3階建の計画を変更していただき保存するか、発掘調査が必要であると決定した。以上の決定を受け、埋文課と福岡梶包株式会社は協議を重ねたが、現状保存は困難であり、止むを得ず建物建設予定地について記録保存のための調査を実施することとなった。

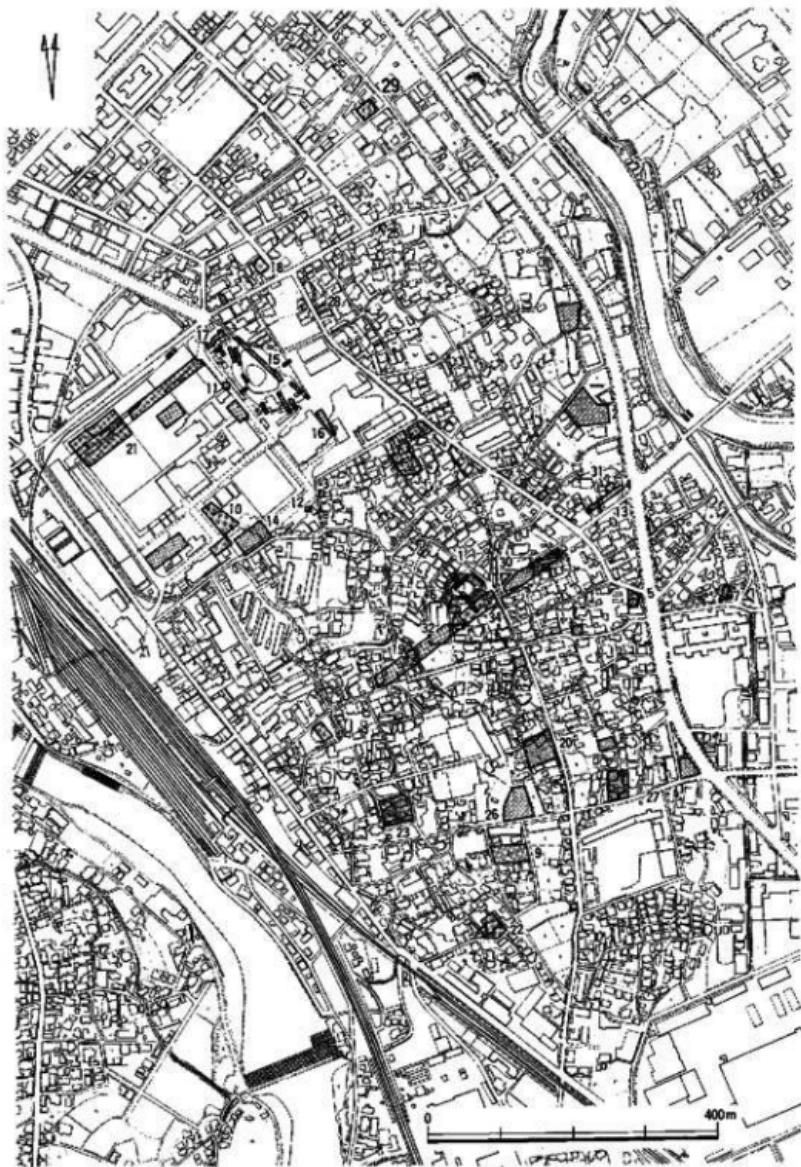
以下の調査決定を受け、調査費・調査期間・出土遺物の扱いなどについて協議に入り、それぞの契約事項がととのい、調査契約が成立した。

本調査は、調査事務所等の条件整備がととのった後、那珂遺跡群北東端部での各時代・各時期の様相把握を目的として約1ヶ月間実施した。

遺跡調査番号	9026	遺跡略号	NAK-29	分布地図番号	037-0085
調査地地籍	博多区東光寺町一丁目162~165				
用途面積	479.93m ²	調査対象面積	415.22m ²	調査面積	313m ²
調査期間		1990年8月2日~同年8月25日			

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成しましたが、緊急調査のため充分なる体制を組むことができませんでした。調査開始3日目に、当初の調査担当である山口が交通事故発生のため調査に専従することが不可能となり、菅波の応援を得、福岡梶包株式会社をはじめとする関係各位の費用負担、作業員提供、クレーン車提供など多大なる協力・援助のもとに発掘調査は進行し、終了することができました。整理報告作業は、山口の業務增多から必ずしも順調に進行



したとはいえないが、報告書を発行することができました。

調査から整理作業にわたって、ご協力・援助をいただきました福岡樅包株式会社関係各位におわびいたしますとともに謝意を表します。また、背波をはじめ、調査・整理作業に従事していただきました作業員各位に心からお礼申し上げます。

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第二係

教育長 井口雄哉（前） 尾花剛

文化財部長 花田兎一（前） 後藤直

埋蔵文化財課長 柳田純孝（前） 折尾学

第二係長 柳沢一男（前） 山崎純男

調査担当 山口謙治 背波正人

試掘調査担当 横山邦繼（主任文化財主事） 吉留秀敏 薩本正志

事務担当 松延好文（前） 中山昭則

調査・整理補助員 大丸陽子 平川敬治 牟田裕二（故） 山口朱美

調査・整理協力者 鹿山洋（現堀文課） 松岡大介（明治大学） 石本哲司・大塚恵治（現八女市教育委員会）・岡崇（以上、福岡大学歴史研究部） 太田明子 尾崎君枝 甲斐田嘉子 神谷玲子 品川伊津子 平野徳子

3. 遺跡の位置と立地 (Fig. 1・2)

福岡平野のほぼ中央部には、北流し博多湾に注ぐ郡河川・御笠川があり、両河川間の中流域から下流域にかけては春日丘陵から延びる中位あるいは低位の段丘が形成されている。この中・低位段丘は著しく開析され、開析谷が発達しているが、現在は削平と客土が繰り返され、南東から北西方向に断続的に延び徐々に低くなっていく高まりがある程度となっている。この高まりの上には、南から雜錦隈・友野・高畑・板付遺跡・井尻・諸岡・郡河遺跡が所在し、北端に比恵遺跡が位置し、さらに北には砂丘が発達し、博多遺跡群が所在している。なお、御笠川東岸には低位段丘が発達し、雀居遺跡が所在している。現在、この地域は西鉄火車山線・JR鹿児島本線・国道3号線・県道など主要幹線が縦横に走り、宅地化が進み博多市街地と一体化しつつある。標高13mから5m前後の緩やかな傾斜をもち、高まりあるものはほぼ平坦な地形となっている。

郡河遺跡群は先土器時代、奥土器時代、弥生時代から近世まで連続する遺跡群で、福岡平野中央部北端の中位段丘（標高6～10m）に所在し、比恵遺跡の南で接している。本調査地は郡河遺跡群の北端部の標高6.7m前後に位置し、比恵遺跡群に近接し、調査前は宅地として使用されていた。国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から20.4cm、東から12cmにあたる。

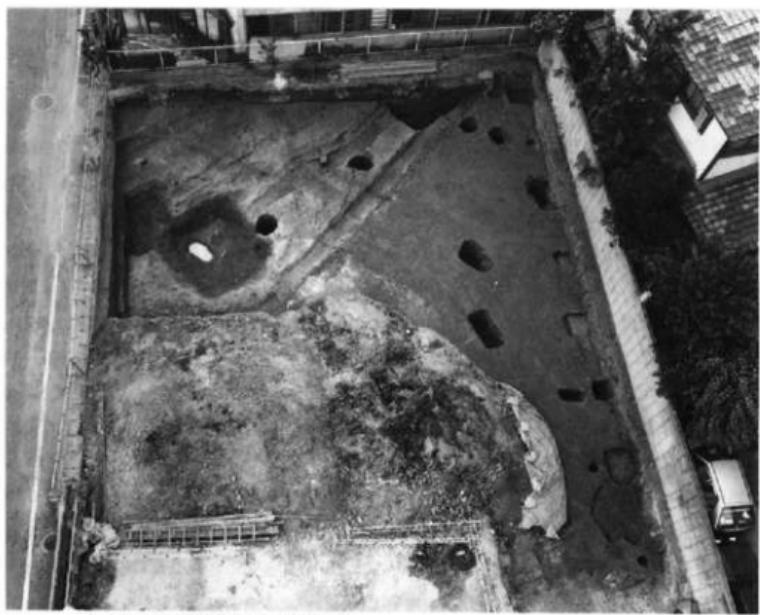


Fig. 3 那河遺跡群第29次調查全景

II 調査の記録

1. 調査の概要

営業ビル建設予定地は、東側・南側は道路に、北側・西側は民有地のブロック壁に囲まれ長方形を呈している。調査前は西側に営業ビルがあり、東側は駐車場として使用され、標高6.6~7mのほぼ平坦地となっていた。今回の調査にあたって、埋文課は建設計画者との協議を重ね、東側の駐車場用地は長方形を呈し道路に面していること、約150m²の広さをもつてることから将来の調査が可能であるとし、調査は、営業ビル建設地と建物に挟まれた北側・西側・南側の残地を対象とすることにした。しかし、北側・西側はブロック壁があるため40cm前後、70cm

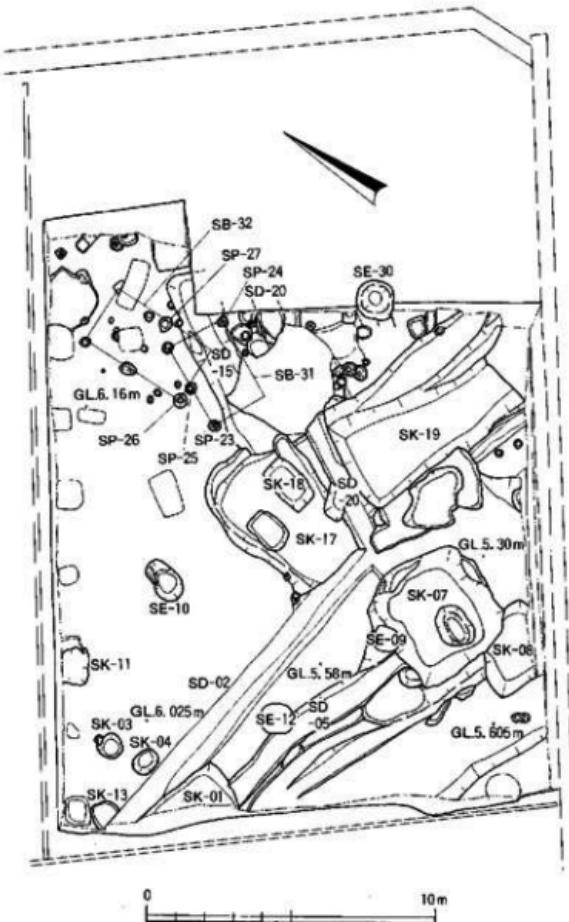


Fig. 4 那珂遺跡群第29次調査地点遺構配置図

前後と引きを取り調査区とした。

調査は50~70cmの盛土を重機によるスキ取り後、攪乱を除去し、遺構検出作業を実施することから始めた。その結果、標高6m前後の鳥栖ロームの面で遺構を検出した。

検出遺構としては、古代の井戸・溝・柱穴・中世から近世の井戸・地下式横穴・土壙・溝などがある。検出遺構は、地下式横穴・土壙をSK、井戸をSE、溝をSD、柱穴をSPと遺構記号を使用し、検出順に遺構記号の後に2桁の通し番号を付した（例 SK-01・SD-02……SE-09）。なお、本書では遺構名と遺構記号は併記する。

出土遺物は、9026の調査番号の後に、土器は00001から、木器は00301から、石器・土製品は01001からの5桁の通し番号を付し、登録番号とした。本書では、遺構ごとに谷部出土の石器・土製品を除いた遺物については通し番号を付し、石器・土製品については、遺構と遊離した遺物として独自に通し番号を付し使用した。

2. 遺構と出土遺物

1) 土壙 (SK) と出土遺物

本調査地では、SK-01・03・04・07・08・11・13・17~19の10基の土壙を検出した。SK-01・08・11の3基は地下式横穴、SK-03・04は墓と考えられ、他は性格不明である。以下、各土壙ごとに出土遺物も含め詳述していく。

SK-01

本土壙は調査区の西北部に位置し、西側民有地へ延びている。第5号溝を切り、現代の第2号溝に切られている。長軸3.3m+α、短軸2.2m+αの長方形を呈し、80cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開きながら立ち上がっている。第8・11号土壙と同じ覆土となっていることから、地下式横穴の玄室部と考えられ、中世のものか。

SK-03 (Fig. 5・6・9・10)

本土壙は、調査区の北西部に位置している。平面形は径80cm前後の不整円形を呈し、80cm強遺存している。断面形は桶状を呈し、以下に示す少量の遺物が出土したのみである。SK-04と同様の性格をもっていることから、墓といえよう。

本土壙からは数点の土師器が出土した。図化できたのは、径8cmを測る糸切り底の土師器底部片1点のみである。

本土壙は、遺構形態から木棺を使用した墓の墓構と考えられ、第4号土壙と同様の土師器片が出土していることから近世初期のものといえよう。

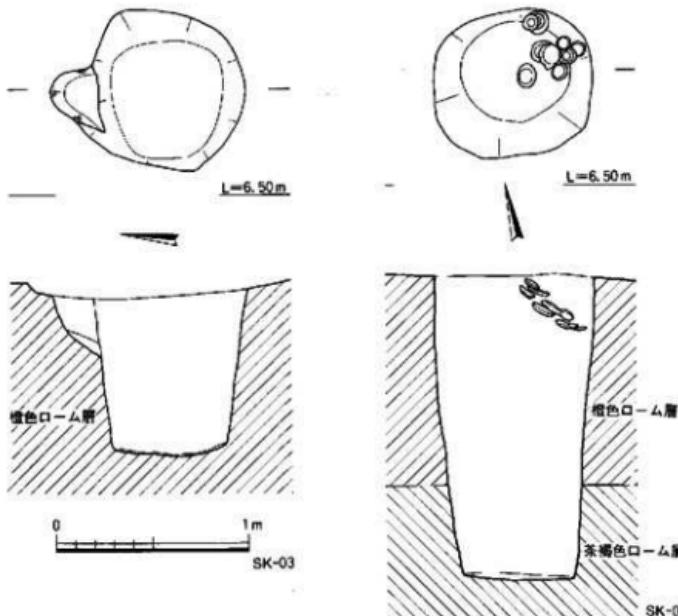


Fig. 5 第3・4号土壌 (SK—03・04) 実測図

SK-04 (Fig. 5・7~11)

本土壌は、調査区の西北部の第3号上曠の南に位置している。平面形は不整円形で径80cm強を測り、断面形は桶状を呈し、1.55m遺存している。検出面から30cmまでの深さに、完形土器皿10点を含む比較的まとまった遺物が出土した。以下は遺物は少なく、暗灰褐色粘質土上、鉄分を含む同色粘質土を覆土とし、床面には灰褐色粗砂が敷き詰めた状態になっている。

出土遺物 (Fig. 9~11)：本土壌からは、比較的まとまった上師器坏・皿が出土した。そのなかで比較的遺存状態の良い12点を図化した。いずれも系切り底である。1~7は小皿で、口径7.9~8.5cm、器高1.5~1.8cm、底径6.2~6.7cm。11は皿で、口径13cm、器高2.7cm、底径10cm。8~10・12は坏で、口径12~13.7cm、器高2.4~2.5cm、底径8~9.1cm。

本土壌は、土壤形態から木棺を使用した墓曠と考えられ、出土土師器から中世末から近世初期のものといえよう。

SK-07 (Fig. 12・13・15~22)

本土壌は調査区の南部に位置し、第2号溝、第8号土壌を切り、第9号井戸に切られている。

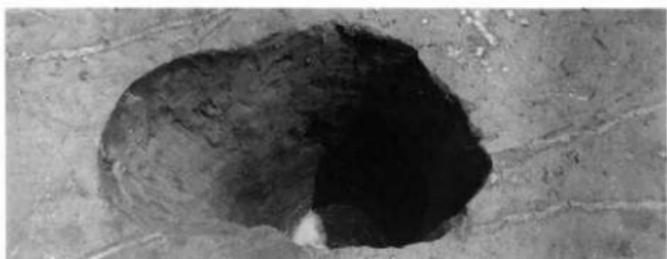


Fig. 6 第3号土壤完掘状態

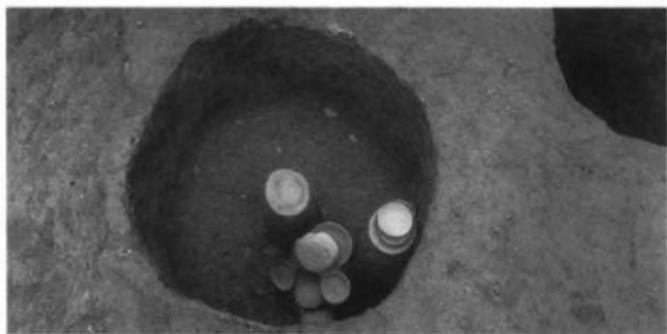


Fig. 7 第4号土壤土師器出土状況



Fig. 8 第4号土壤完掘状態

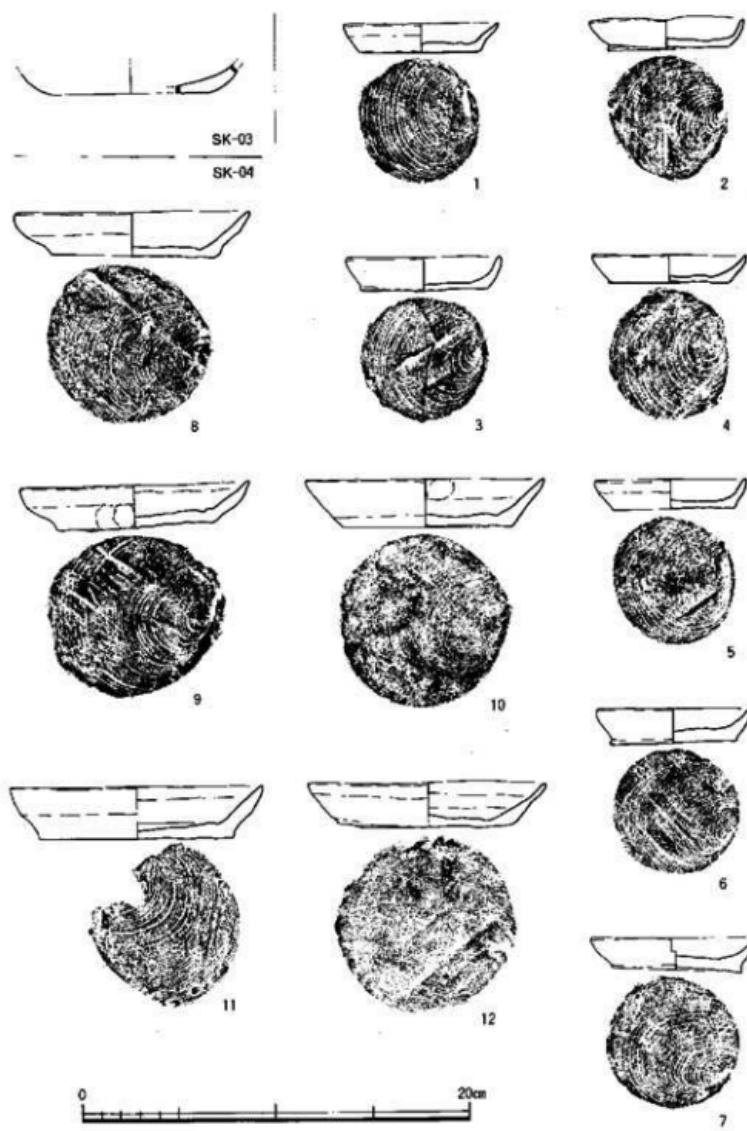


Fig. 9 第3·4号土塘出土土師器之素面圖

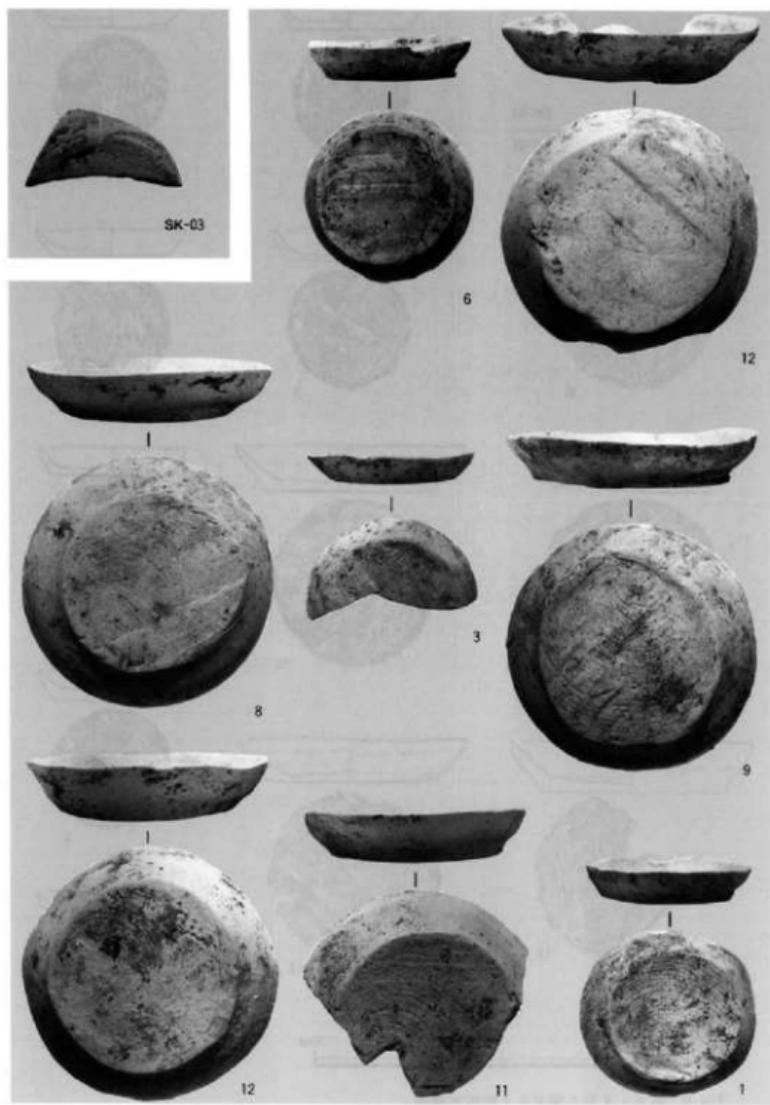


Fig. 10 第3·4号土窑出土土器

平面形は隅丸方形を呈し、一边3.8mを測り、80cm前後で2.4×3mの隅丸方形を呈する床となる。床は凹凸が激しく、南西部に長軸1.5m、短軸1.1mで90cmの深さをもつ平面形精円形の上端状の掘り込みがある。上部造構と下部造構は別の造構とも考えられるが、埋土が同じであることから同一造構とした。

出土遺物 (Fig. 15-22)：本土壤からは弥生時代から中世の多量の遺物が出土した。中世のものからみていくことにする。1-7は青磁で、1・2・6・7は竜泉窯系、4は同安窯系か。2は壺、他は碗である。2は口径7cm、器高3.3cm、底径3cm。8-12は白磁碗。13-20は土師器で、14のはかは系切り底である。13・16は壺、他は皿である。14は口径9cm、器高2.1cm、底径5.2cm。17・18は口径7.2cm、7cm。器高1.7cm、1.8cm、底径4cm、4.6cm。21-24は瓦質のもので、22は土鍋、他は擂鉢か。21は備前系か。23・24は口径31.5cm、23cm。

25-46は須恵器で、25-32は壺蓋、33は蓋、34-38は高台付壺、39は受け部をもつ壺、40は無高台壺、41・42は高壺、43-46は甕である。25-27は無返しで、26は天井部のツマミが剥落している。25は口径12.8cm、器高1.8cm。28-31は口縁の返しをもつ。39は口径13.6cm、器高4.9cm。51-63は土師器で、51-56は甕か移動式甕の把手。57-59は移動式甕。60-63は器表に格子目印き痕をもつ甕。64・65は瓦で、64は丸瓦、65は駒斗瓦か。66は滑石製の石鍋で、器表に煤の付着があり口径27.2cmを測る。25-27・33-38・40・43-46・51-63、34-66は奈良時代、28-32・39・41・42は古墳時代後半期のものといえよう。

47-50は弥生土器で、47・48は甕、49・50は壺の底部か。47は逆L字状をなす口縁をもち、口縁直下に三角貼付け突帯を一条巡らし、口縁から突帯にかけては丹塗りが施されている。

本土壤は下部造構が鳥居・八女ロームを掘り貰き、含水層である硬砂層まで掘り込んでいることからなんらかの水利施設といえよう。本土壤出土の奈良時代以前の遺物は第5号溝を切っているためと考えられ、本土壤は13世紀に掘削され、16世紀末頃廃棄されたと考えられる。

SK-08

本土壤は調査区の南西部に位置し、第7号土壤に切れ、南側の道路まで延びている。平面形は切られ、南側の道路まで延びている。平面形は隅丸方形を呈し、一边2.5mを測り、75cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がっている。

本土壤からは少量の遺物が出土したが、時期を限定できるものはない。覆土が、第1号土壤・第11号地下式横穴と共通することから、本土壤は中世の地下式横穴の玄室か。

SK-11 (Fig. 14・23)

本地下式横穴は、調査区の西北部に位置している。北側民有地との境には約1.8mのブロック壁があり、玄室は東北方向に延びていることが確認できたが、ブロック壁崩落のおそれがあるため壁壇の一部を調査し、完掘を断念した。壁壇は検出面では1m前後の隅丸方形を呈し、



Fig. 11 第4号土壤出土土師器

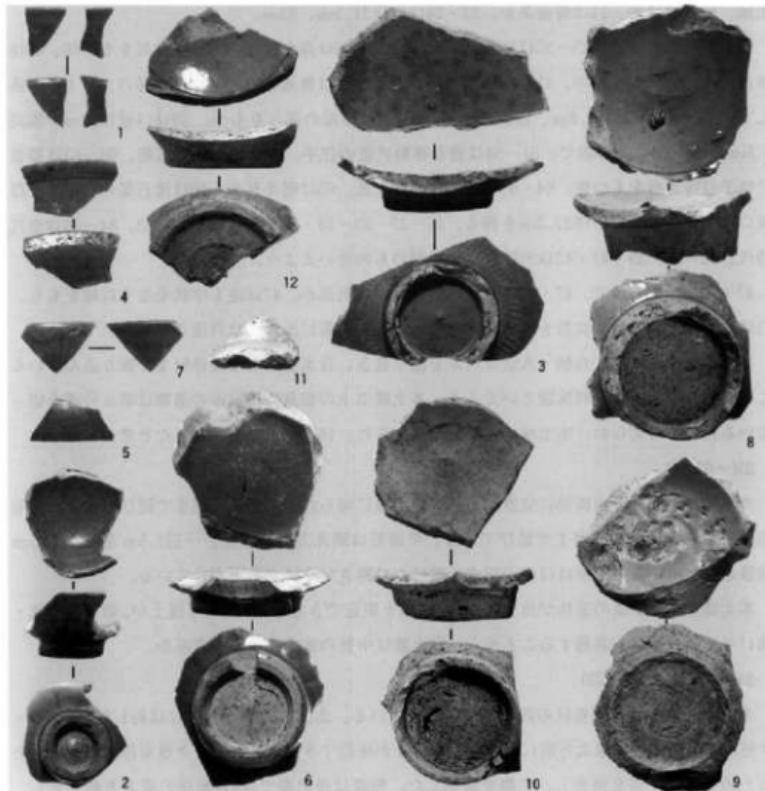


Fig. 12 第7号土壤出土遺物(1)



Fig. 13 第7号土壤完掘状態



Fig. 14 第11号地下式横穴

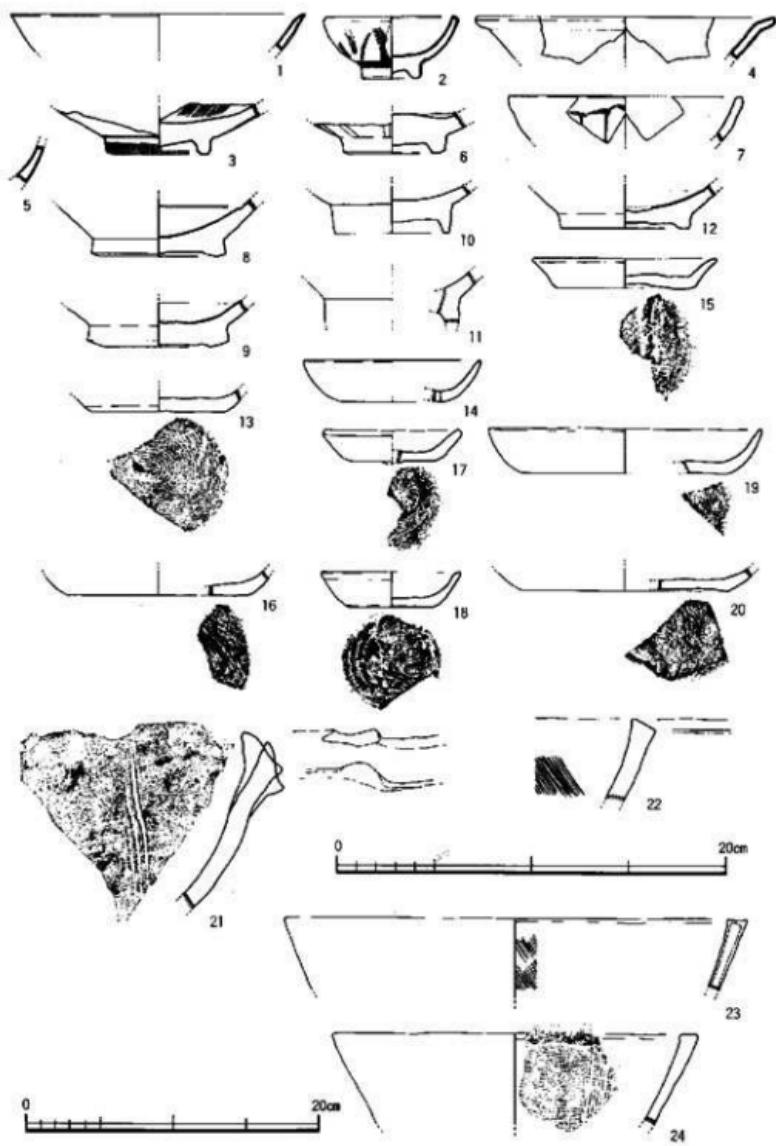


Fig. 15 第7号土墙上出土造物实测图(1)

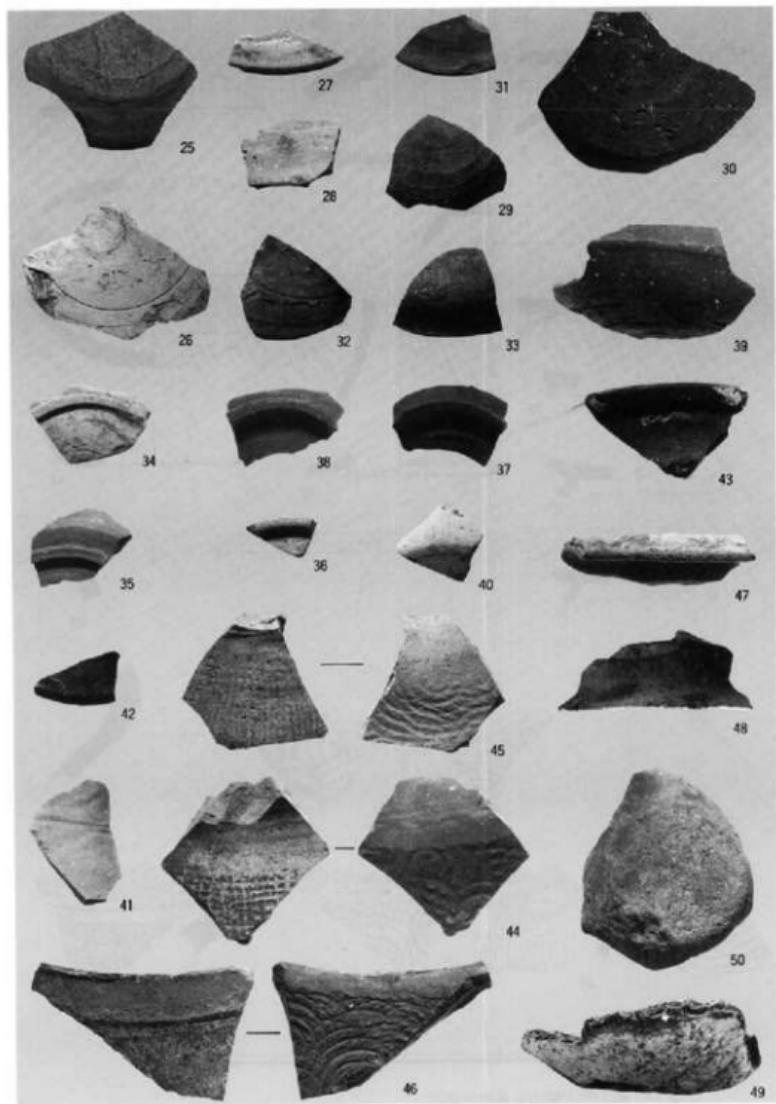


Fig. 16 第7号土壤出土遺物(2)

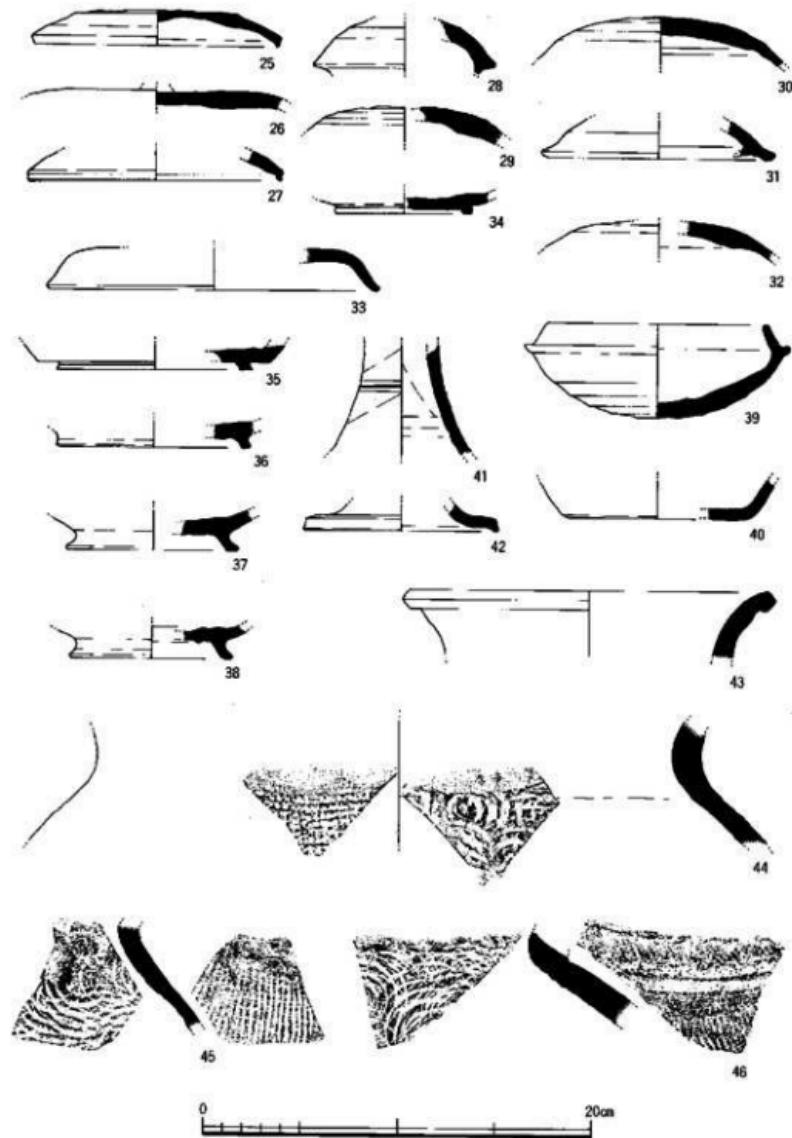


Fig. 17 第7号土壤出土遺物実測図

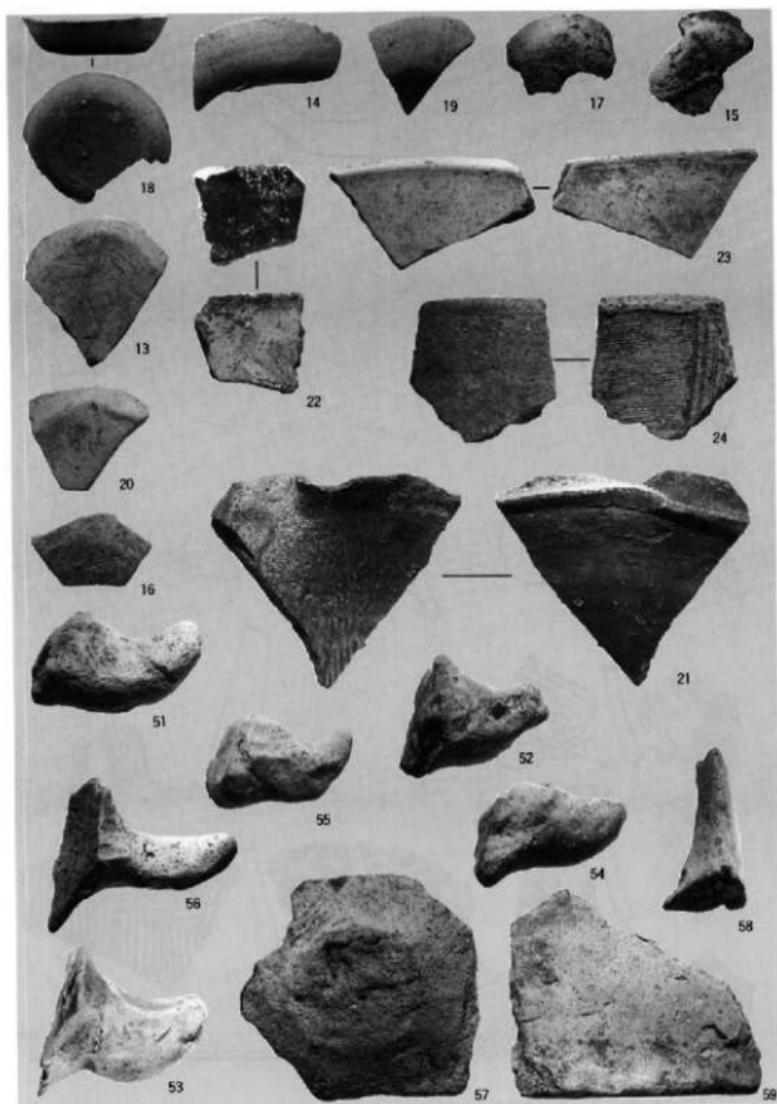


Fig. 18 第7号土城出土遺物(3)

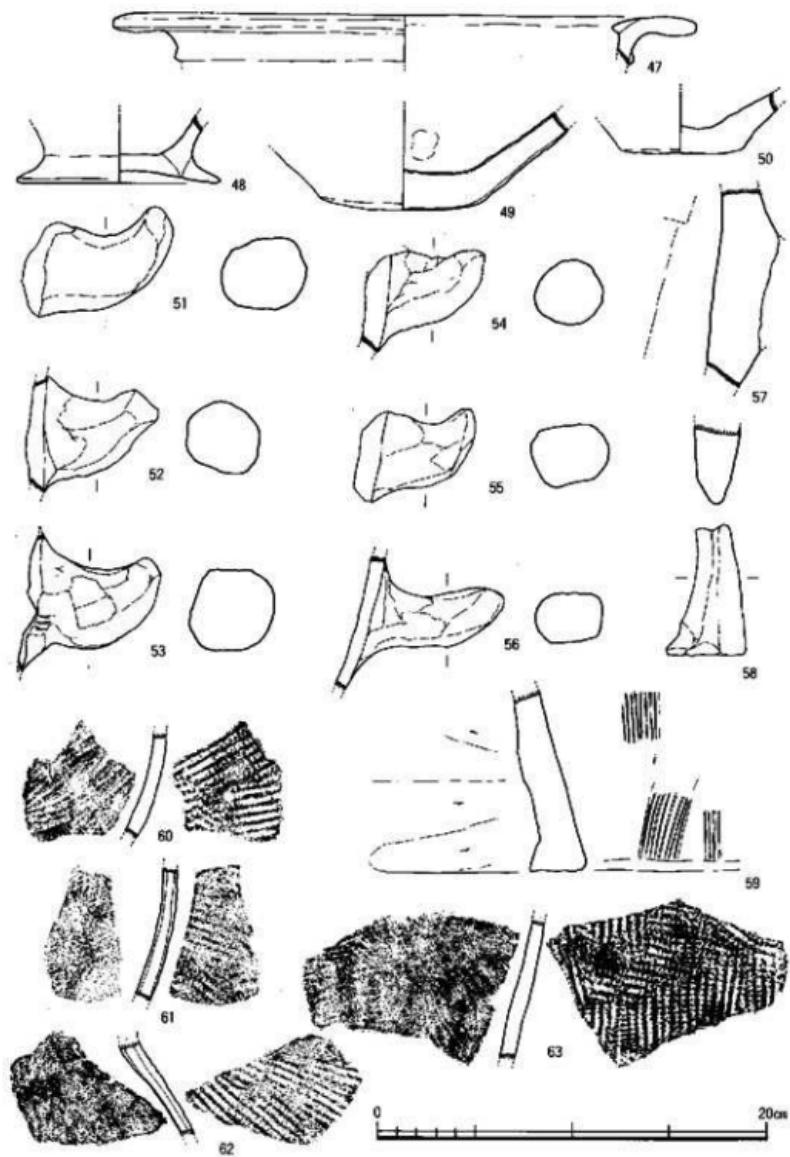


Fig. 19 第7号土壤出土遺物実測図(3)

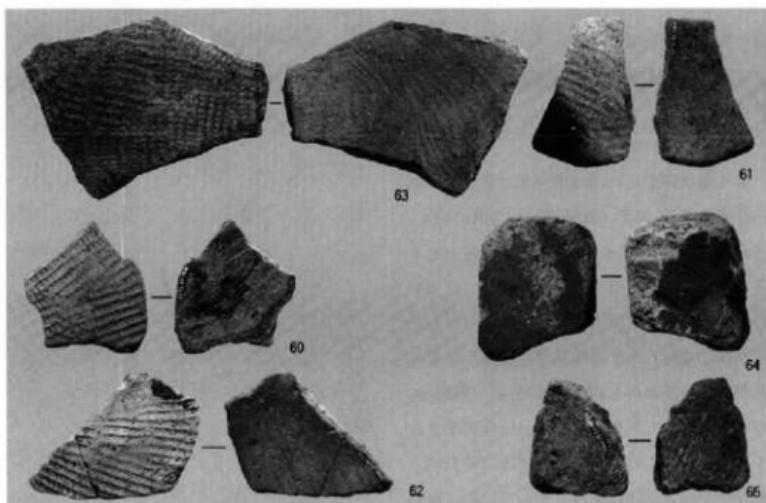


Fig. 20 第7号土壤出土遺物(4)

鳥栖ロームを掘り貫いている。灰色粘質土を埋土とし、検出面から1.3mまで確認した。玄室は検出面下1.3mで天井の一部が確認できた。

本地下式横穴の堅壙から遺物は出土しなかったが、中世のものと考えられる。

SK-13 (Fig. 24・25)

本土壙は調査区の北西部隅の第3号土壤の西側で検出し、第2号溝に切られている。平面形は隅丸方形を呈し、一边95cm前後を測り、15cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がっている。本土壙からは少量の遺物が出土した。

出土遺物 (Fig. 24・25) : 本土壙出土遺物のなかで図化できたのは、土師器皿・鉢の各1点である。1は糸切り底の皿で、口径9.2cm、器高1.1cm、底径6.9cm。2は土師質の

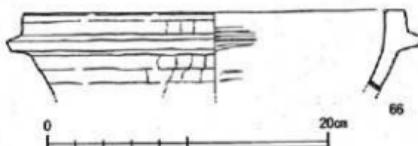


Fig. 22 第7号土壤出土石鍋実測図

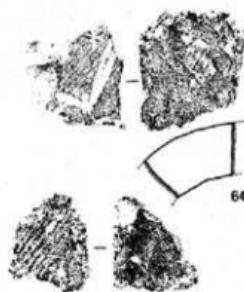


Fig. 21 第7号土壤出土遺物実測図(4)

鉢の底部片である。

本土壙は出土遺物から、中世末から近世初期のものといえよう。

SK-17・18 (Fig. 26・27)

本土壙は調査区のほぼ中央部に位置し、第15号溝を切り、第2・20号溝に切られている。南北約5m、東西約4mの平面形隅丸長方形を呈する土壙で、検出面から50cm前後ではほぼ平坦な床となる。床面のはば中央部よりやや北寄りに、並行した2基の墓主体部状をなす土壙がある。西側のものは長軸70cm、短軸45cmの平面形隅丸方形を呈し、15cm前後の深さをもっている。この土壙の床面はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がっている。東側のものは長軸90cm、短軸55cmの隅丸方形を呈し、45cm前後の深さをもち、西側のものよりやや大きいが同形態をもっている。第17・18号土壙としたが、覆土は共通しており、同一造構で、 5×4 mは掘り方と考えられ木棺の痕跡はなかったが、下部の2基の土壙は棺埋置壙と考えられる。本土壙の掘り方および東側棺埋置壙から少量の遺物が出土したが、副葬遺物は検出できなかった。

出土遺物 (Fig. 26・27) : 1～6は掘り方、SK-18-1・2は東側棺埋置壙から出土したものである。1・2は陶器で、3は同安窯青磁皿、4・5、SK-18-1はいずれも糸切り底の土器器皿で、5は口径6.6cm、器高1cm、底径5cm。6は土師質の鉢、SK-18-2は土師質の擂鉢。

以上から本土壙は二棺埋置の墓で、近世のものといえよう。

SK-19 (Fig. 28・34)

本土壙は調査区の東南部に位置し、第2・20号溝に切られている。幅4m前後で

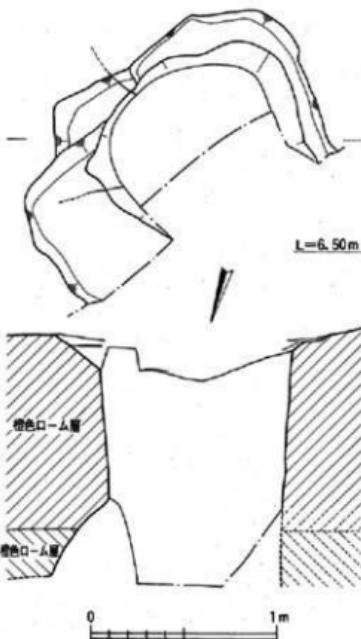


Fig. 23 11号土壙 (SK-11) 実測図

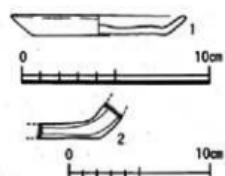


Fig. 24 第13号土壙出土遺物実測図

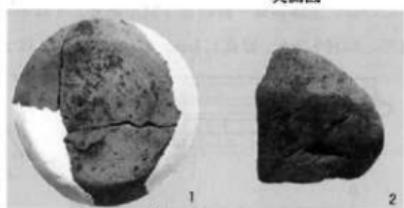


Fig. 25 第13号土壙出土土器

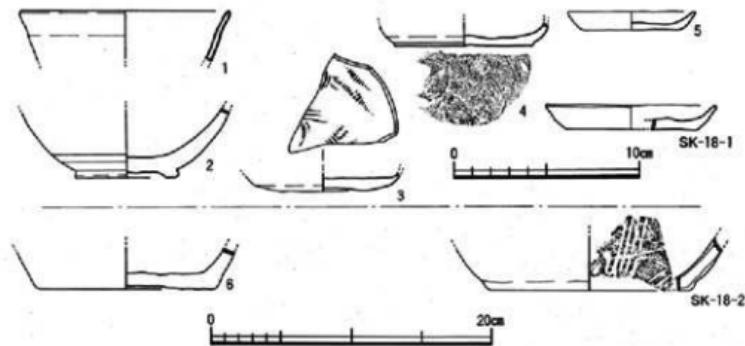


Fig. 26 第17・18号土壤出土遺物実測図

長方形を呈し、南側の道路へ延びている。1m前後遺存し、鳥栖ロームを掘り貫き八女粘土層に掘り込んでいる。床面はほぼ平坦で、水分を多量に含んだ粘質土が埋土となっている。水利施設か。

出土遺物 (Fig. 28-34) : 1~4 は磁器碗で、青花が施されている。1 は口径11.6cm、器高7.2cm、底径5cm。5~7 は陶器碗で、7 は糸切り底、5 は口径9.5cm、器高6.4cm、底径4cm。10~12 は高取焼?で、10 は壺、11 は油徳利、12 は香炉か。16・17 は唐津焼?碗で、16 は口径10.9cm、器高6.8cm、底径4.2cm。13・18~20 は陶器の鉢で、19 は口径10.2cm、器高3.1cm、底径4.9cm。20

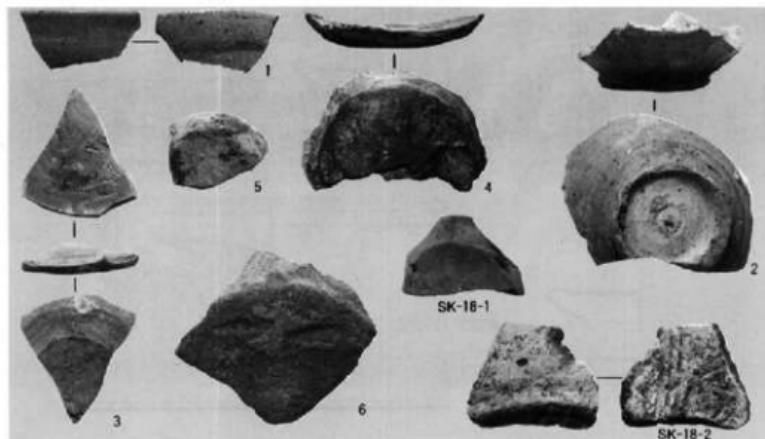


Fig. 27 第17・18号土壤出土遺物

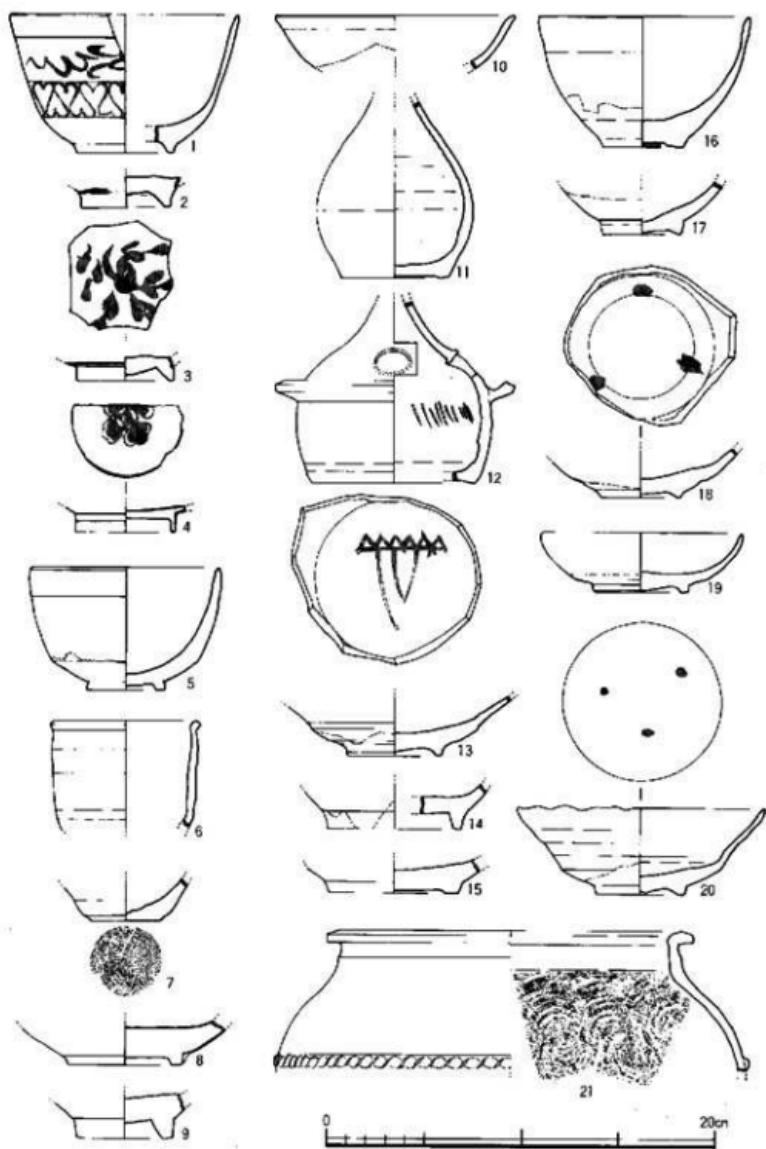


Fig. 28 第19号土堆出土造物実測図



Fig. 29 第19号土壙出土遺物(1)

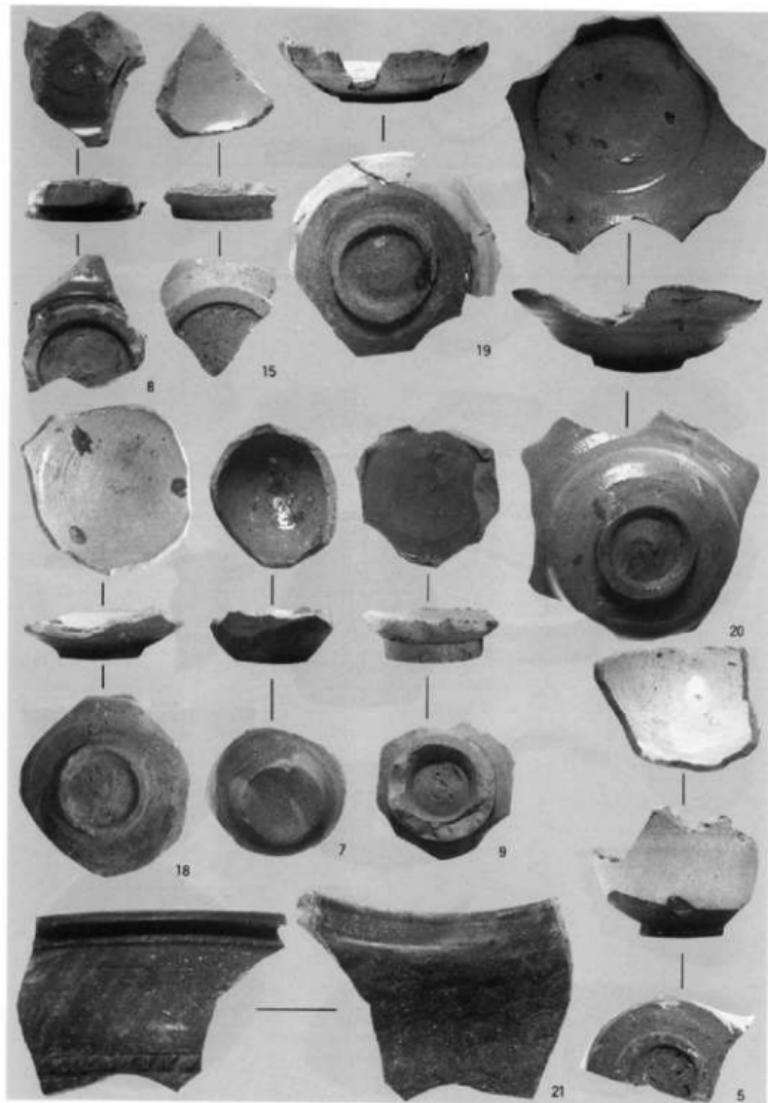


Fig. 30 第19号土壤出土遺物(2)

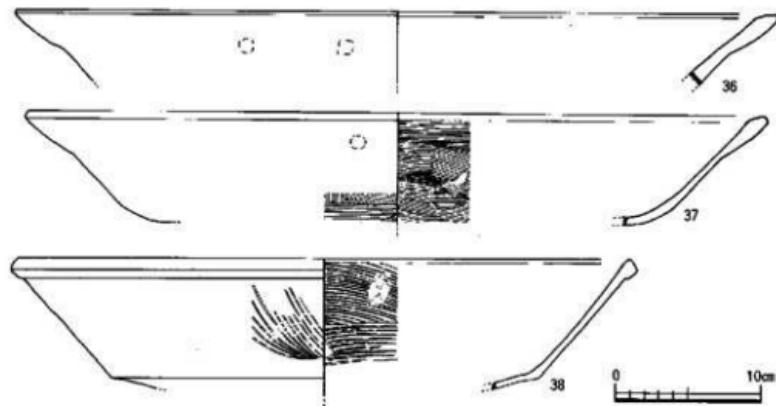
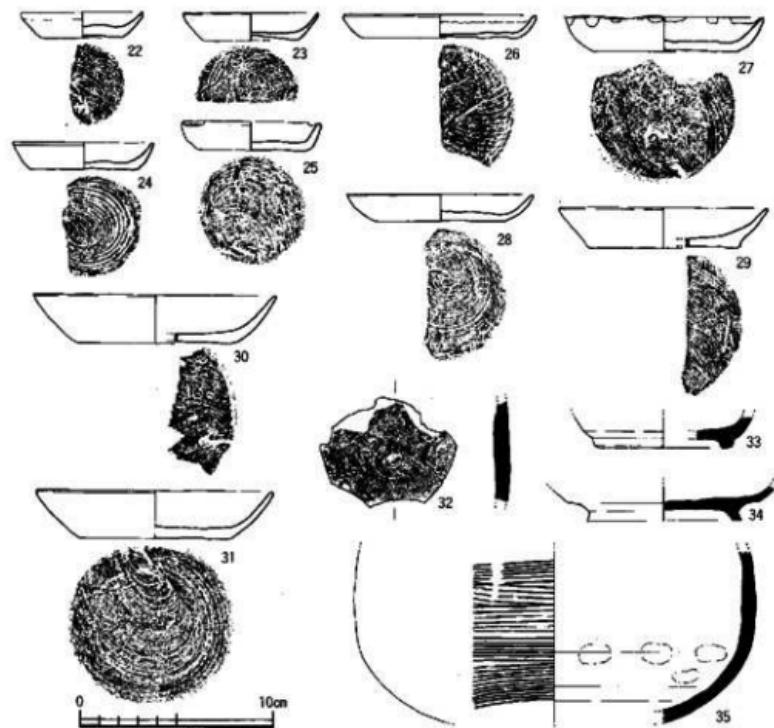


Fig. 31 第19号土壤出土遺物実測図(2)

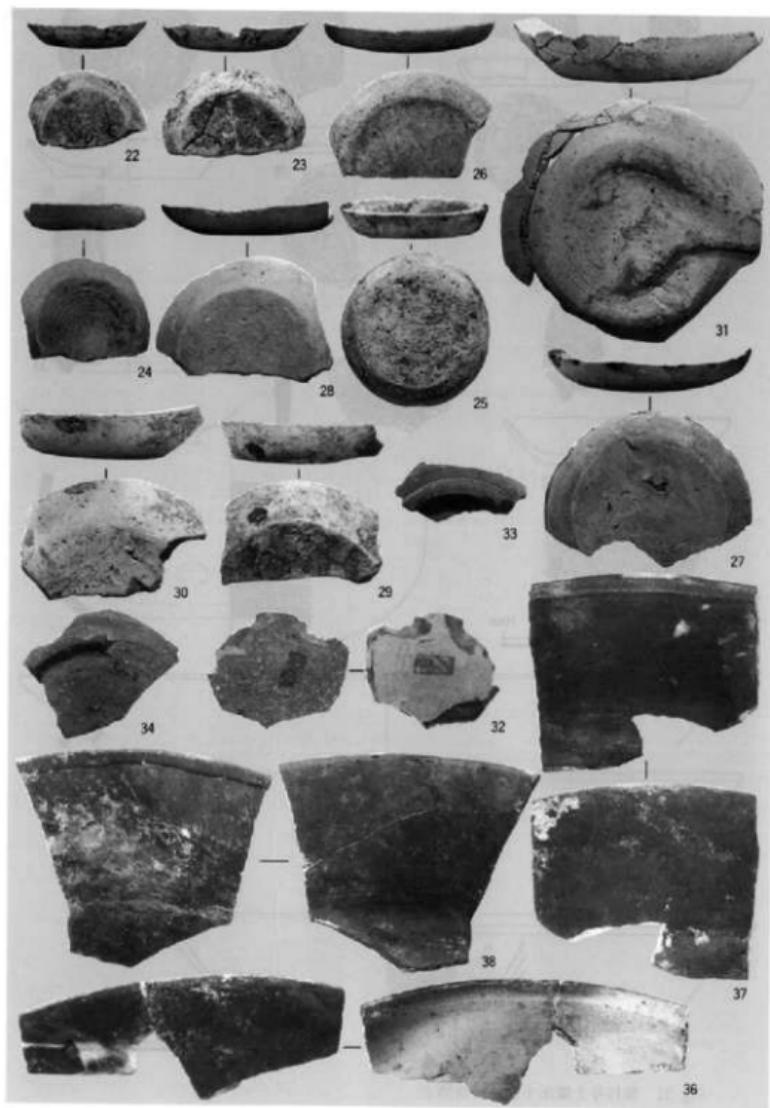


Fig. 32 第19号土壤出土遺物(3)

は口径12.8cm、器高4.5cm、底径4.5cm。8・9は同安窯系の青磁碗、15は白磁碗。21は肥前系の甕と考えられる。22~31は糸切り底の土師器で、30・31が壺、他は皿である。22~25の口徑は6.2~7.2cm、器高は1.3~4.5cm、底径は4.1~5.5cm。26~29の口徑は9.6~10.8cm、器高は1.2~2.1cm、底径は6.6~8cmで、26の外底には板状痕がみられる。30・31は口徑12.4cm、12.2cm、器高2.5cm、底径8.4cm、7.9cm。36~38は瓦質の土鍋で、口徑は52.4cm、51cm、43cmを測る。

32~35は須恵器で、35は提瓶、33・34は高台付壺、35は甕である。32~35は第5号溝の混入品と考えられる。

本上塙の下部は、埋土に水分を多量に含んでいたため木製品が出土した。39~44は曲物で、39~42は底板、43・44は側板、41はヒノキの柾目取り材、39・40・42はスギの柾目取り材を用いている。47はツゲ製の横櫛で、両端および歯の大部分を欠失している。45・46は芯持ち材を用いた杭である。

本上塙は水利施設と考えられ、出土遺物から近世初期に掘削され、近世後期に廃棄されたものといえよう。

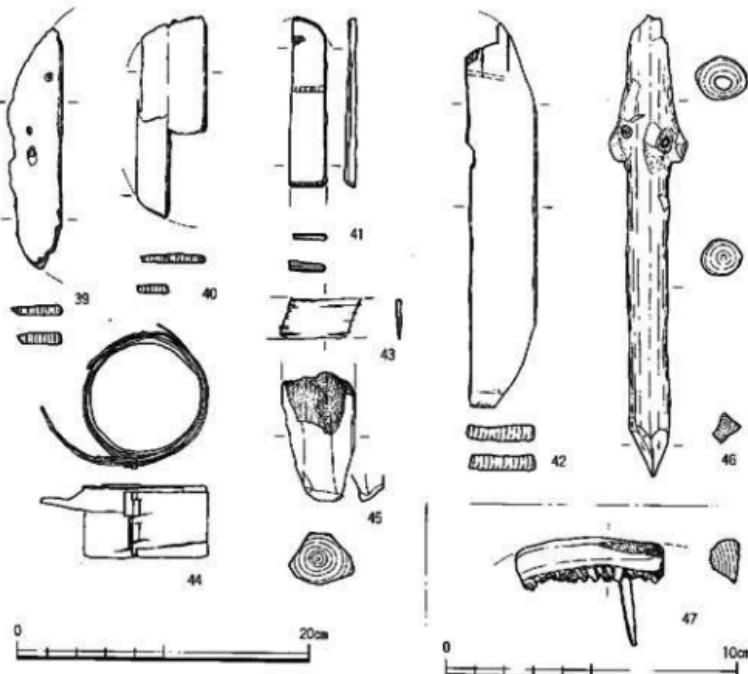


Fig. 33 第19号土塙出土木製品実測図

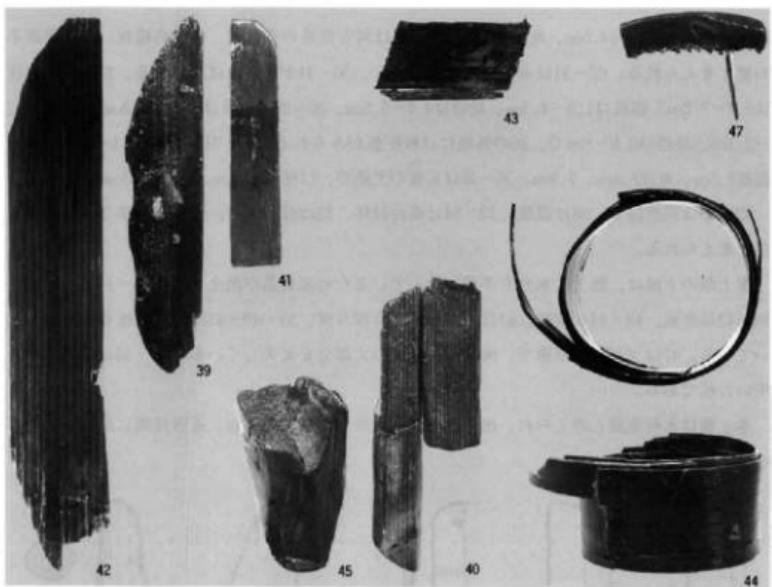


Fig. 34 第19号土壤出土木製品

2) 井戸 (SE) と出土遺物

本調査区では、第9・10・12・30号井戸 (SE-09・10・12・30) など5基の井戸を検出した。調査区の南西部隅および調査区中央よりやや南西寄りに位置する第9号井戸は、近世末から現代にかけての井戸である。以下、第10・12・30号井戸について出土遺物を含め詳述していく。

SE-10 (Fig. 37~39)

本井戸は、調査区中央部からやや北寄りに位置している。検出面では長軸1.5m、短軸1mの不整梢円形を呈し、鳥栖ローム下部まで掘り込んで1.7m強遺存している。完掘した結果、床面はほぼ平坦で、断面形は桶状をなし上部に棚をもっていることがわかった。本井戸は湧水層まで掘削していないことから、雨水を利用したと考えられる。本井戸からは少量の遺物が出土したのみである。

出土遺物 (Fig. 38・39): 本井戸からは土師器が少量出土し、図化できたのは下部から出土した土鍋1点である。土師質で、鉢状をなす胴部から屈曲して大きく開き口縁となっている。外面の屈曲部および胴にかけて3段の指印痕がみられ、口縁は横ナデ調整が、内面屈曲部下にはハケ目調整が施されている。胎土には石英粒を少量含み、堅緻で焼成もよい。なお、外面に



Fig. 35 第12号井口桶出土状况



Fig. 36 第5号溝遺物出土状態

は厚く煤が付着し、内面にも部分的に炭化部が付着している。口径44.4cm、残存高13cm。

本井戸は、含水層である硬砂層まで掘り込んでいないことから雨水を利用したもので、少量の出土遺物から中世のものといえよう。

SE-12 (Fig. 35・37・38・40~42)

本井戸は調査区西側中央部に位置し、第5号溝に切られている。検出面では径1m強の円形を呈し、鳥柄ロームを掘り貫き八女粘土層を掘り込み1.7m遺存している。床面は西から東へ傾斜し、筒状をなしている。本井戸からは、少量の上器と汲み桶と考えられる木製桶1点が床面から出土した。

出土遺物 (Fig. 38・40~42)：1は糸切り底の土師器坏で、口径12.2cm、器高2.6cm、底径8.6cmを測る。2~4・7・8は須恵器で、2・3は高台付坏、4・8は盃、7は足。2は口径16cm、残存高4.6cm。3は底部径8.9cm。4は長頸壺の颈部。8は底部。5・6・10・11は土師器で、6は壺、他は移動式窓である。9は弥生時代後期の器台で、受け部・底部も欠失している。

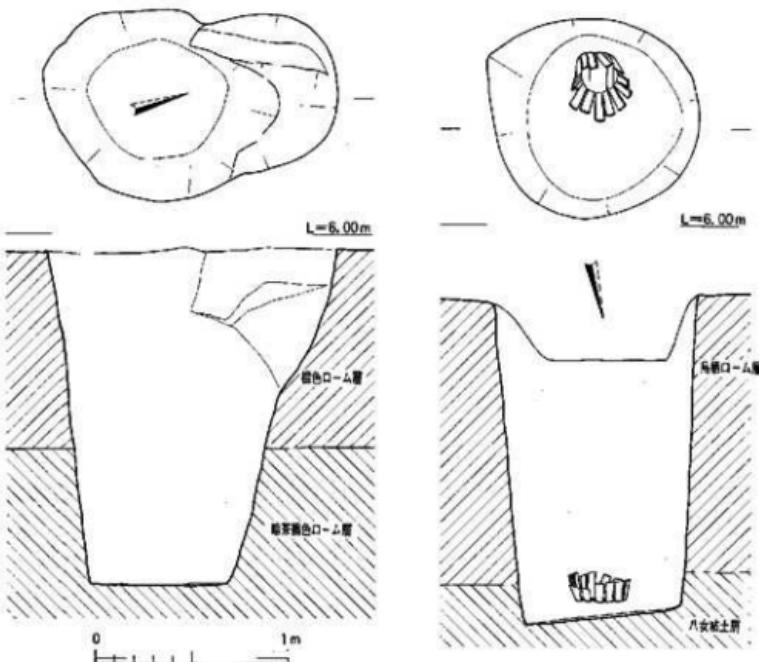


Fig. 37 第10・12号井 (SE-10・12) 実測図

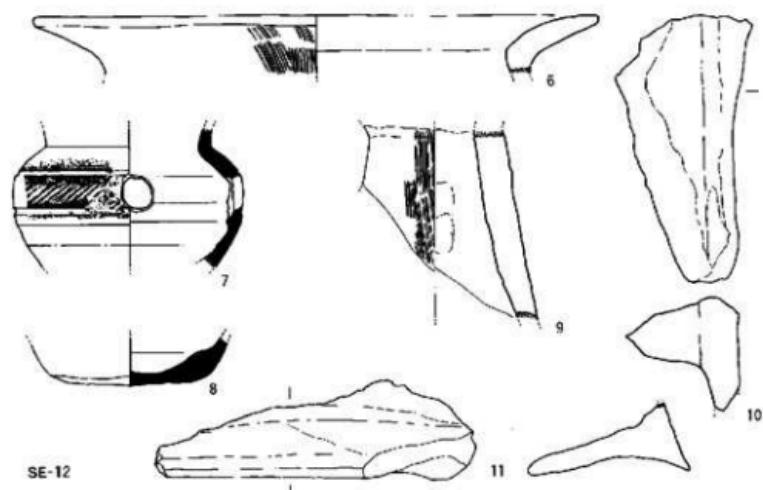
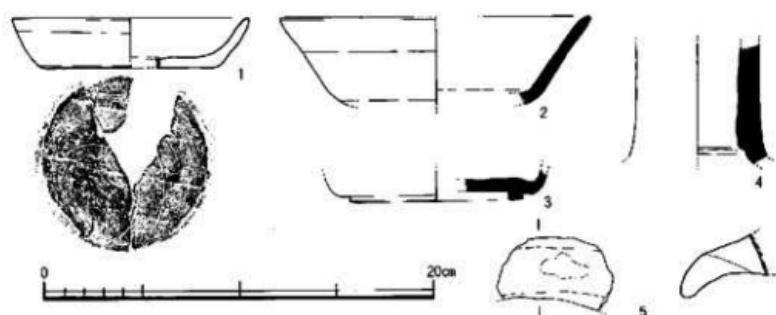
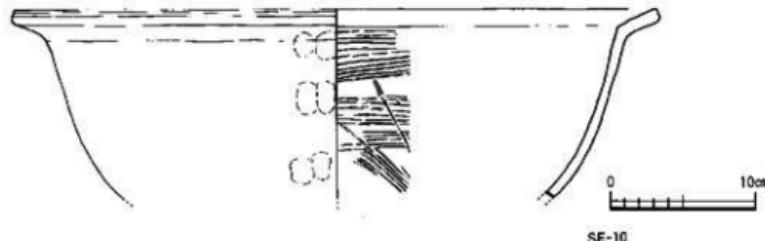


Fig. 38 第10号井戸出土土鍋および第12号井戸出土遺物実測図

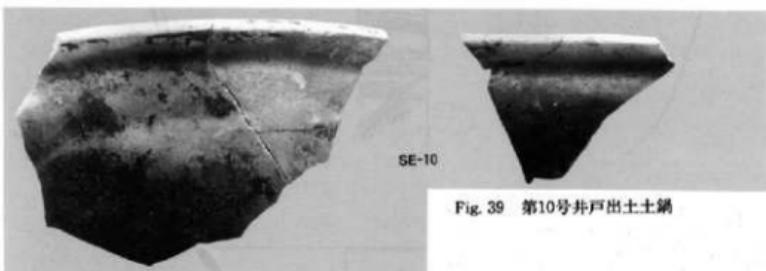


Fig. 39 第10号井戸出土土鍋

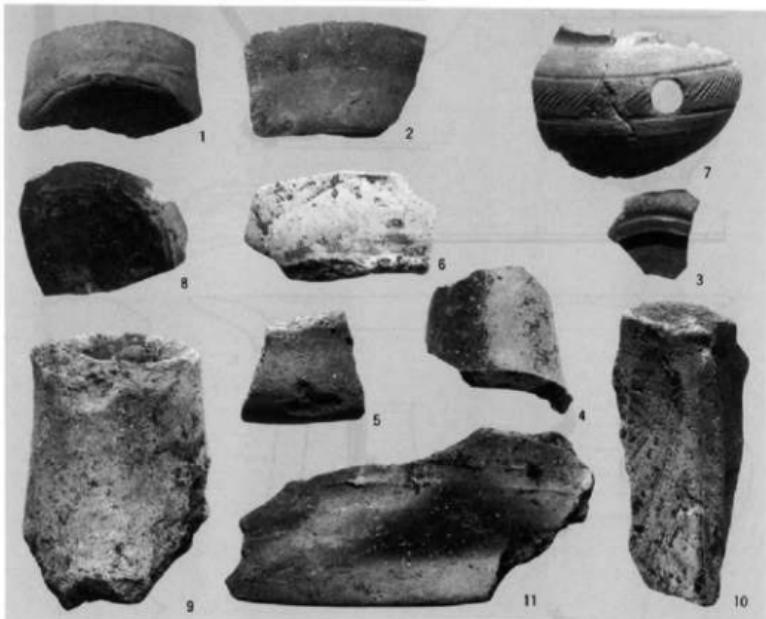


Fig. 40 第12号井戸出土遺物

12は床面から出土した汲み桶である。1枚の底板と15枚の側板からなっている。側板の上下2段についている圧痕から、竹綱枠で固定したと考えられるが竹綱枠は残っていない。口径22cm、底径18.6cm、2cmの上げ底で、口縁下4.2~6.5cmの側板1枚に一辺2.1cmのツルベ紐を通して方形孔をもっている。用材としてはヒノキの極目取り材を用いている。底板は内底19.25cm、外底は18.7cm、最大厚1.6cmを測る。側板は完全に15枚出土したが、事務所移転の際9枚を紛

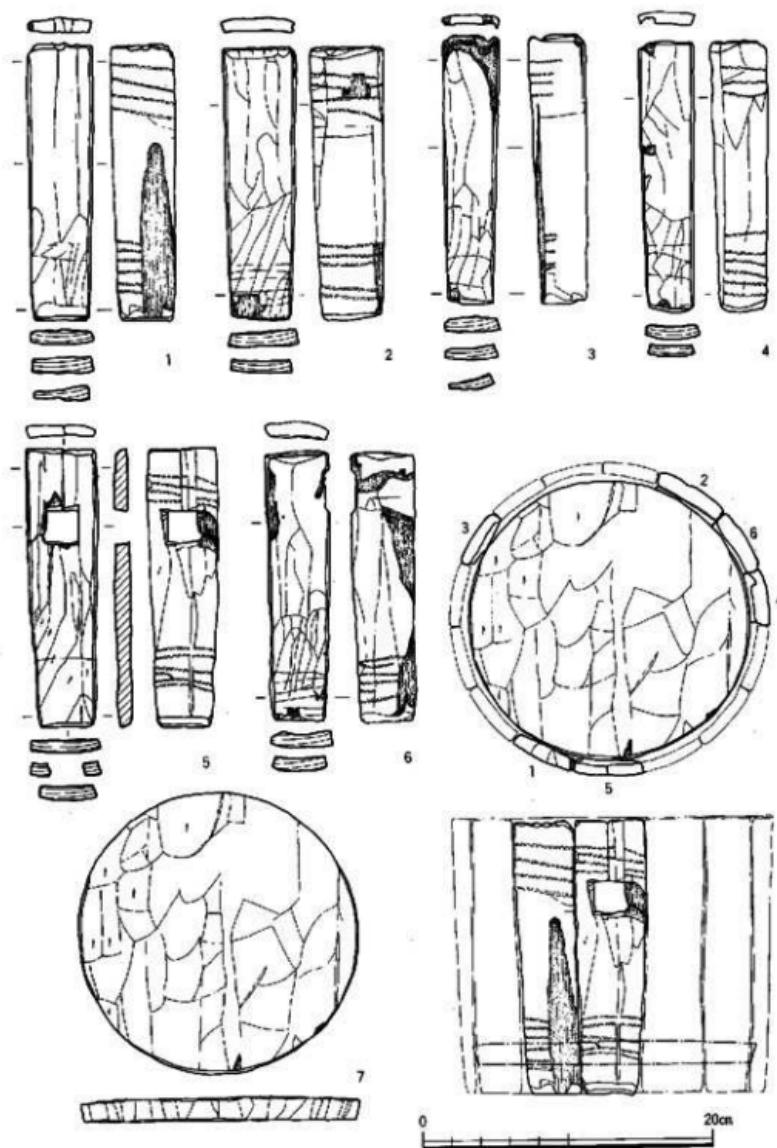


Fig. 41 第12号井戸出土埴12尖底図

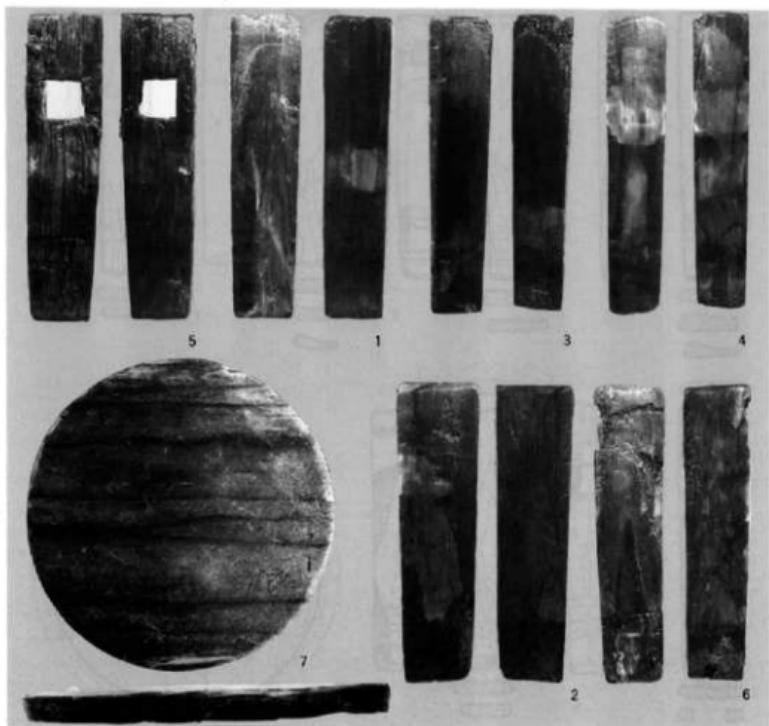


Fig. 42 第12号井戸出土桶⑫

失した。 固化した6枚が遺存しており、器長は18.4~19cm。 幅は3.8~5.1cm、最大厚は1~1.1cmを測る。

本井戸は、含水層である硬砂層まで掘り込んでいないため雨水を利用したもので、出土遺物から中世のものといえよう。

SE-30 (Fig. 43・44)

本井戸は調査区東壁中央部で検出し、建物建築基礎掘りの際立会いし、遺物を取り上げた。検出面は標高5.95mの盛土を除去した鳥栖ロームの面で、平面形は径1.3mの円形を呈し、鳥栖ローム・八女粘土層を掘り貫き含水層である硬砂層まで掘り込んでいる。井筒は素掘りで径50cmを測る。本井戸の井筒からは土器・木器のまとった遺物が出土した。

出土遺物 (Fig. 43・44) : 本井戸の井筒出土遺物は、建物建築工事基礎掘りの際、工事関係者

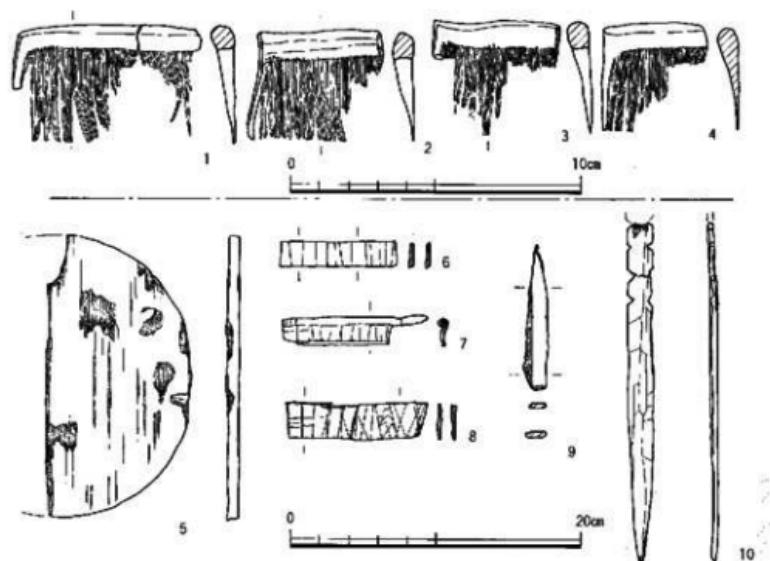


Fig. 43 第30号井戸出土木製品実測図

によって取り上げられた。出土遺物のうち土器は、福岡桐包株式会社で展示したいとの希望があり、現在展示されている。本報告書に掲載すべきであったが、山口の業務繁多と怠慢から岡化することができなかった。出土上器としては、須忠器の高台付坏・無返しの坏蓋・壺、上師器の高台付坏・無高台坏・壺などがある。

1～4はツゲを用いた横樋で、別個体。齒幅はつけ根で6mm、厚さ0.6mm前後と非常に薄い。5～8は曲物で、5は底板、6～8は側板である。5～7はスギの板目取り材、8はヒノキの柾目取り材を用いている。9はスギのナナメ取りの板材、10は薺串。

本井戸は硬砂層の湧水を利用したもので、井筒出土遺物から8世紀前半に掘削され、8世紀後半に廃棄されたものといえよう。また、井筒下部から出土した坏・坏蓋の完形品、横樋・曲物・薺串は井戸祭祀遺物といえよう。

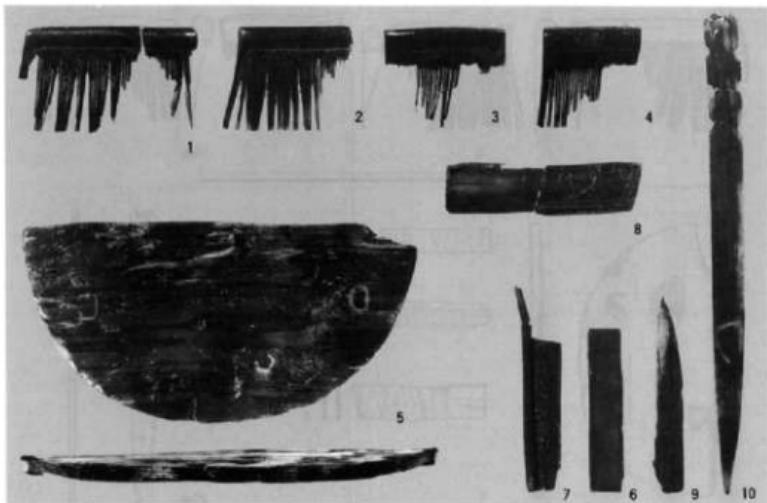


Fig. 44 第30号井戸出土木製品

3) その他の遺構と出土遺物

本調査区では土壤・井戸のほかに、第2・5・15・20号溝 (SD-02・05・15・20) など5条の溝、第23~25号柱穴 (SP-23~25) からなる第31号掘立柱建物 (SB-31) と、第26・27号柱穴 (SP-26・27) からなる第32号掘立柱建物 (SB-32) と35個の柱穴を検出した。

第2号溝は、N-79°-W の方位をとる幅1.2m前後で50cm前後遺存している逆台形溝で、N-32°-E の方位をとり幅1m前後で50~60cm遺存の逆台形溝である第20号溝と交差している。第2・20号溝は灰色粘質土から同色砂質土を覆土としており、屢敷を囲み区画する溝と考えられ、現代の区画整理前まで使用されたものである。

以下、第5・15号溝、第31・32号掘立柱建物、各柱穴出土遺物、谷部の出土遺物（第5号溝の上部構造の可能性がある）、遺構から遊離している石製品・土製品について詳述する。

SD-05 (Fig. 36・46~50)

本溝は調査区の西側に位置し、第1・7号土壤、第12号井戸に切られている。検出面では幅1~1.5mを測り、横断面形は皿状をなし20cm前後遺存している。N-69.5°-W の方位をとり、西に向かって深くなっている。埋土にはFig. 36でもわかるように土器が多く含まれている。また、本溝の南側に並行 (N-65°-W) する溝があり、本溝と掘り返しの溝の可能性がある。

出土遺物 (Fig. 46~50)：1~20・25~35は須恵器で、1~9は壺蓋、10~15は壺、16~19は皿、

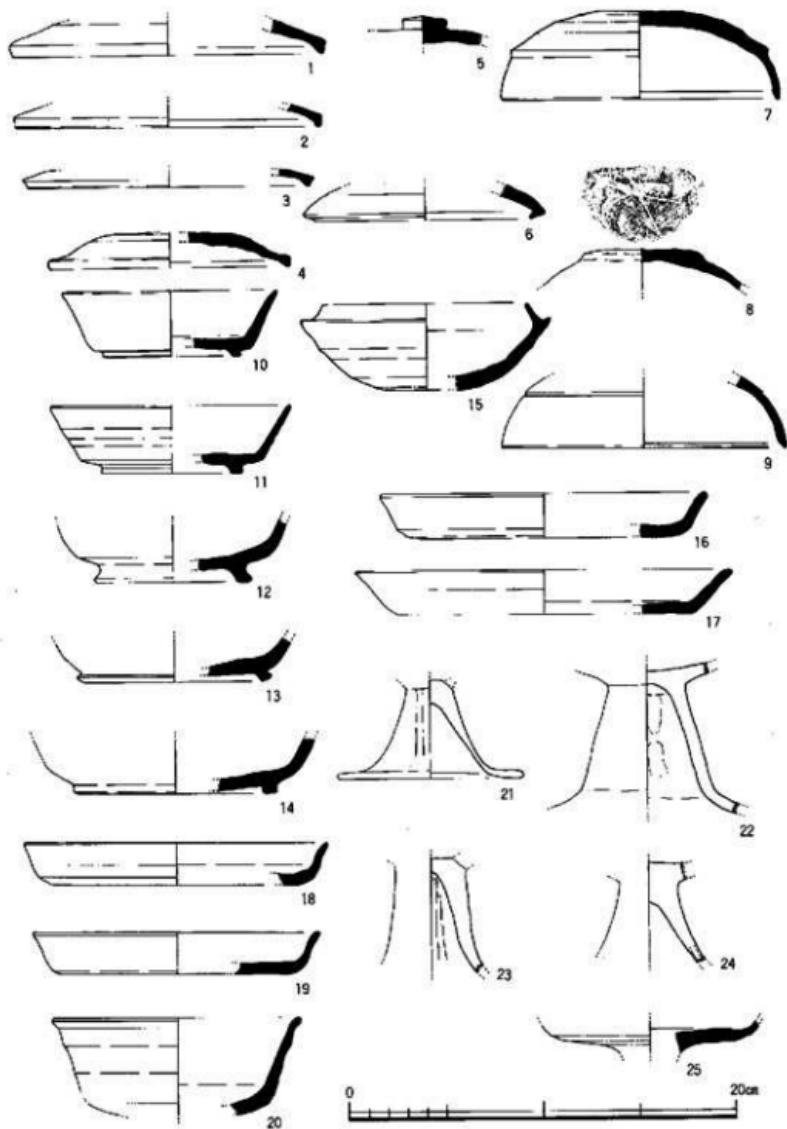


Fig. 45 第5号溝出土遺物実測図(1)

25は高壺、26~28・30・31は壺、29・32・33・35は蓋、34は甌である。1~4は無返しの壺蓋で、口徑12.4~16cmを測る。5は天井部につまみをもつ。6は有返しの壺蓋で口徑12.4cm。7・9は外瓦の天井と口縁の境に段をもつ壺蓋で、8の天井部にはヘラ記号が施されている。口徑14.4cm、器高4.6cm。10~14は高台付壺で、10・11は口徑11cm、12.4cm、器高3.4cm、3.5cm、底径7.2cmを測る。15は受け部をもつ壺で、受け部径12.8cm、器高4.6cmを測る。17は口徑19.4cm、器高2.3cm、底径15.2cmを測り、18・19は口徑15.6cm、14.6cm、器高2.2cmである。20は無高台壺か。29は短頭壺、32・33は長頭壺の頭部である。21~24・36~48・51は土師器で、48は壺、21~24は高壺、36~44・51は甌、45・47は移動式甌、46は甌である。48は口徑13cm、器高3.5cm。

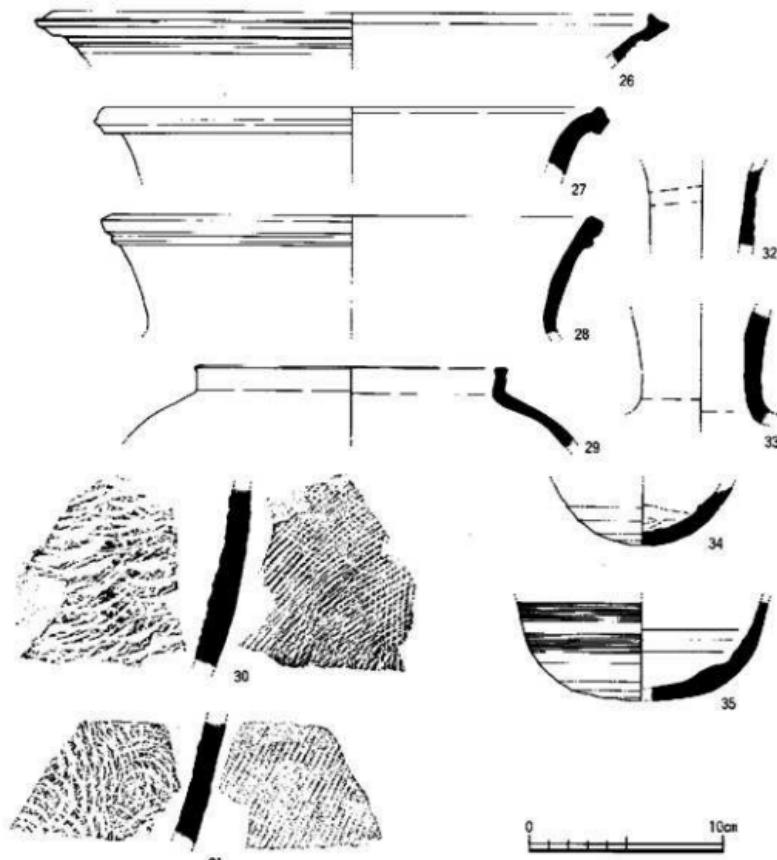


Fig. 46 第5号溝出土遺物実測図(2)

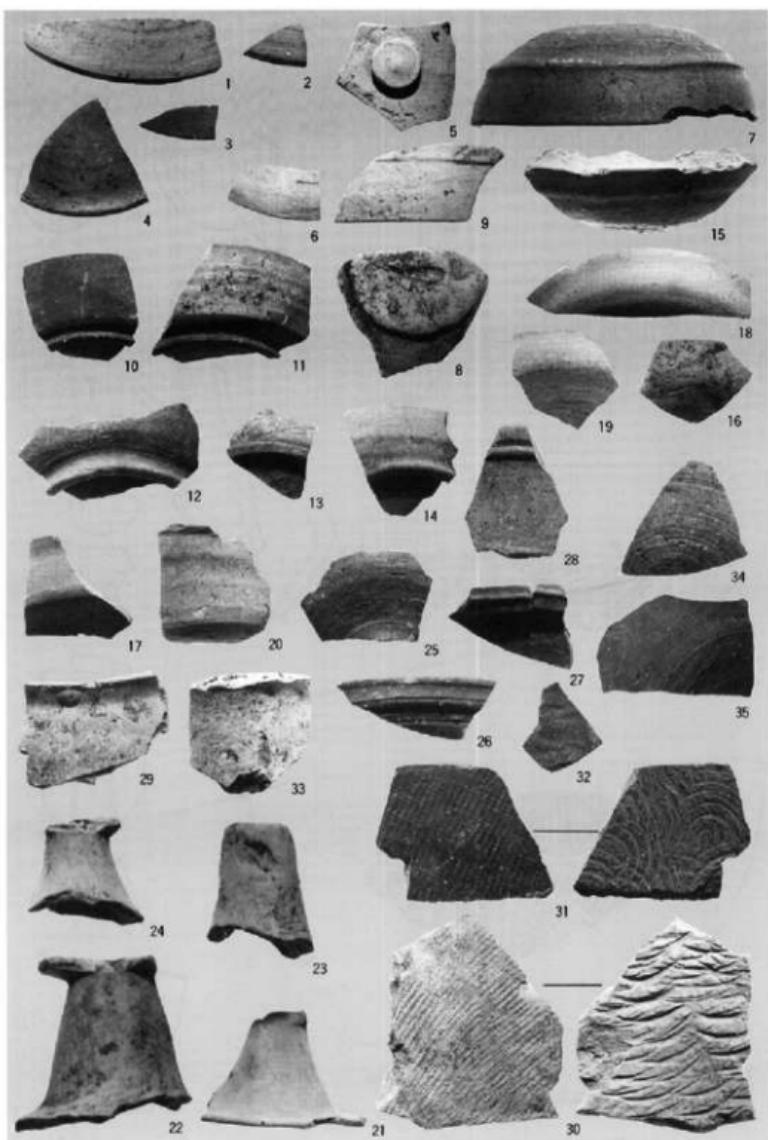


Fig. 47 第5号溝出土遺物(1)

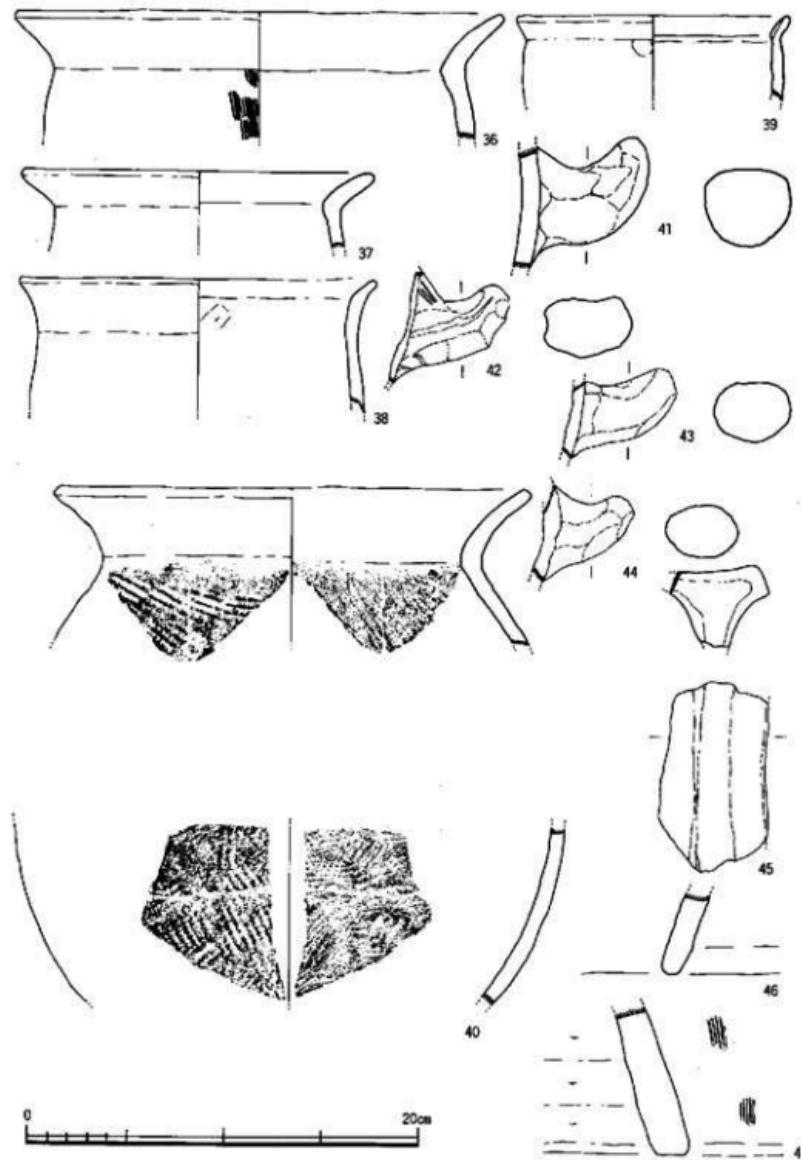


Fig. 48 第5号坑出土遗物实测图(3)

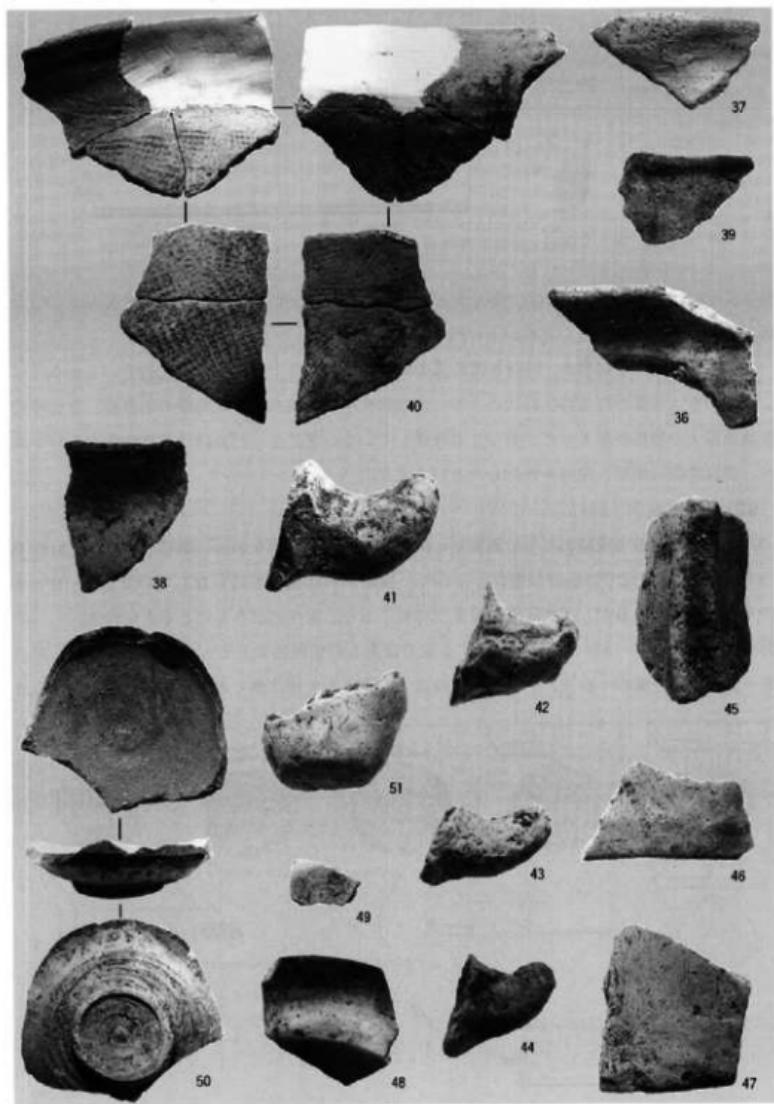


Fig. 49 第5号溝出土遺物(2)

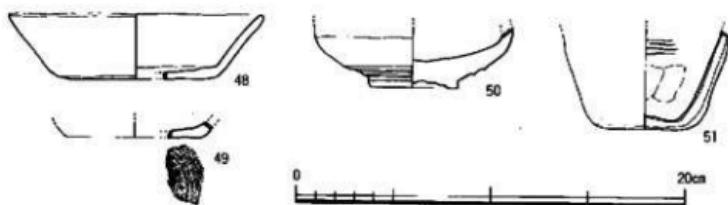


Fig. 50 第5号溝出土遺物実測図(4)

底径8cmを測る。36~39・51は比較的小さい碗で、口徑14~25cmを測る。40は脇部外間に叩き痕が残り、同内面には當て具痕がみられる。

49は糸切り底の上鉢器皿、50は唐津焼系の陶器碗で、取り上げの際の混入品といえよう。

以上から、本溝からは弥生時代の土器、古墳時代中期の須恵器、同時期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器が出土した。もっとも磨耗していないまとまった遺物は奈良時代のものであり、奈良時代に掘削、使用されたものといえよう。

SD-15 (Fig. 51・52)

本溝は調査区の中央部よりやや北寄りに位置し、第31号建物を切り、第17号土塁に切られている。幅1.5m前後で50cm前後遺存しており、横断面形は逆台形状をなしている。N-34°Eの方位をとっているが、調査区東側境界で切れており、南へ曲がるものと考えられる。

出土遺物 (Fig. 51・52): 本溝からは、少量ではあるが比較的まとまった土師器が出土した。

1~6は糸切り底の小皿で、7は環、8は匁である。9~10は甕である。1~6は1がもっと

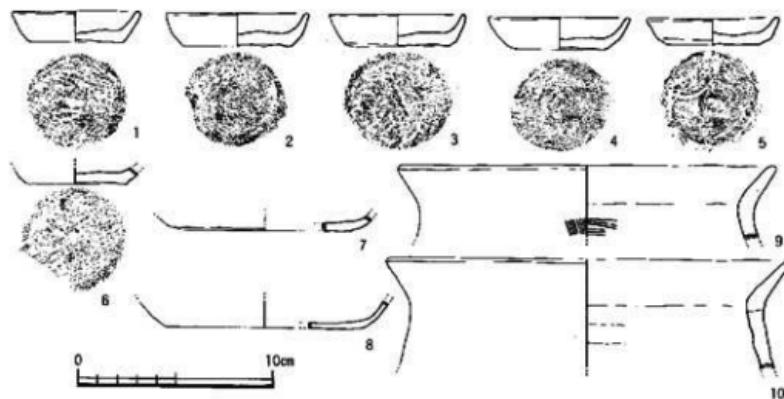


Fig. 51 第15号溝出土遺物実測図

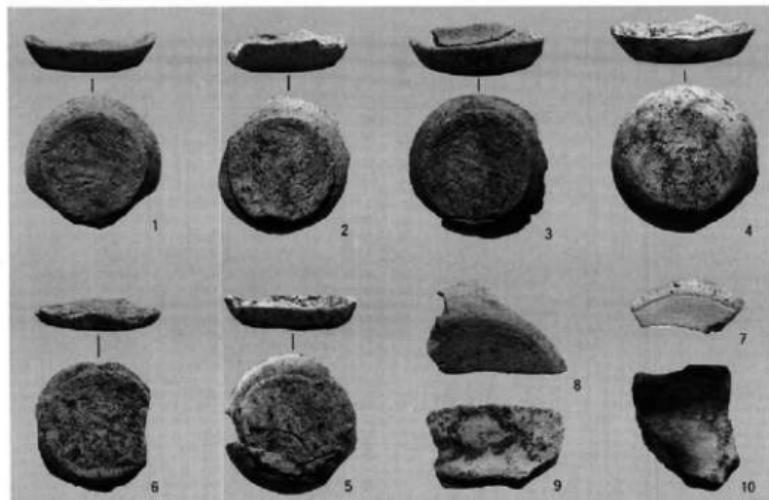


Fig. 52 第15号溝出土遺物

も小さく、口径6.6cm、器高1.6cm、底径6.7cmで、2～6は口径6.8～7.3cm、器高1.4～1.7cm、底径4.4～5.5cm。9・10は古代の土師器の壺で、混入品といえよう。

本溝は屋敷を区画する溝と考えられ、出土土師器から中世末から近世初期のものといえよう。

SB-31 (Fig. 4・53)

本掘立柱建物は調査区の東側中央部からやや北寄りに位置し、第15号溝などに切られている。第23～25号柱穴など桁行2間、梁行1間分の柱穴4個を検出した。桁行の柱間は1.6m、梁行の柱間は2mを測る。桁行はN-27°-Eの方位をとっている。柱穴掘り方は38cm前後の円形を呈し、柱痕跡は径20cm弱を測り、柱穴は50cm前後遺存している。第23～25号柱穴からは、少量の土師器と弥生土器の縦片が出土した。

出土した遺物のうち、図化できたのは第23号柱穴出土の磨耗した土師器の高杯脚部のみである。本建物は1×2間以上の側柱の建物で、柱穴覆土、出土遺物から古墳時代後半期のものといえよう。

SB-32 (Fig. 4・53)

本掘立柱建物は調査区の北東部に位置

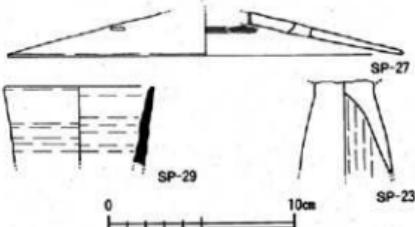


Fig. 53 各柱穴出土遺物実測図

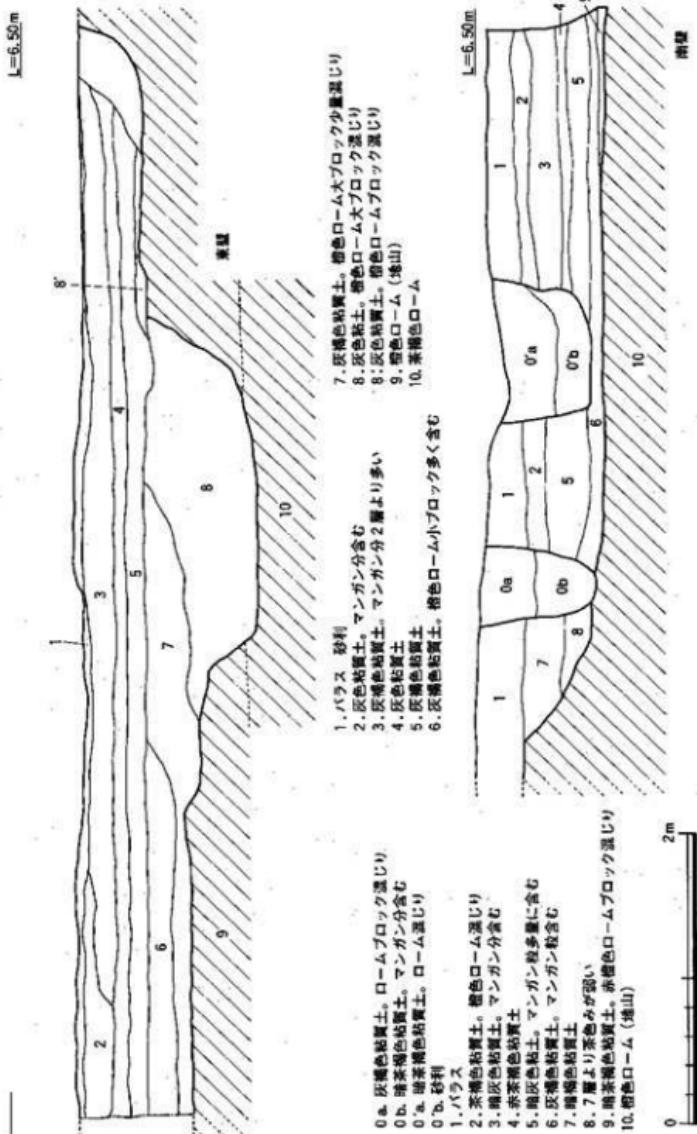


Fig. 54 調査区東壁・南壁土層断面図

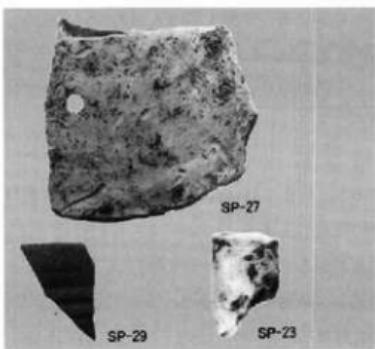


Fig. 55 各柱穴出土遺物

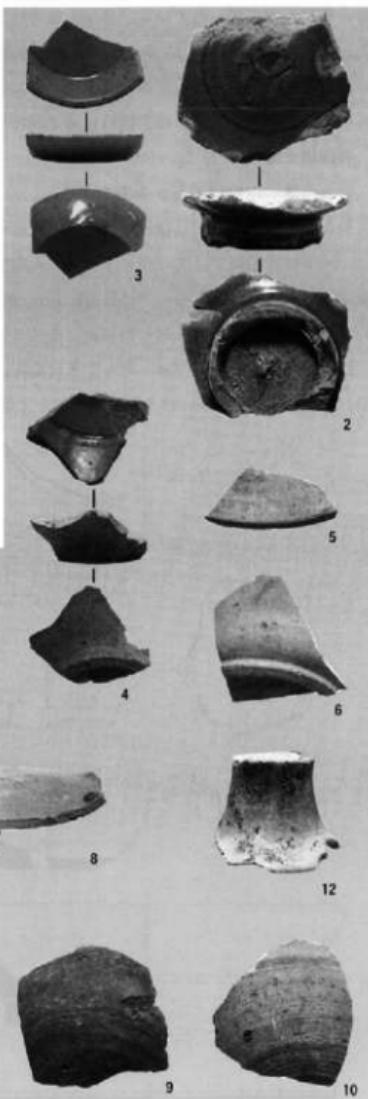


Fig. 56 谷部出土遺物(1)

し、第15号溝に切られている。第26・27号柱穴など桁行2間、梁行1間の5個の柱穴を検出した。桁行・梁行の柱間は1.9mで、磁北の方位をとっている。2×2間の總柱の建物か。

第27号柱穴出土の土師器高杯底部1点を図化した。第26号柱穴出土の土師器片もあわせてみていくと、本掘立柱建物は古墳時代前半期のものか。

谷部出土遺物 (Fig. 56~59)

第5号溝と南側に平行する溝を中心として、幅8.5m前後で45cm前後遺存している。谷底は2条の小溝があるほかはほぼ平坦であり、川水溝の可能性もある。

1・2は青磁碗で、1は竈泉窯、2は同安窯系と考えられる。3・4は白磁で、3は口ハゲの平底皿、4は碗である。3は口径8.4cm、器高1.5cm、底径5.6cmを測る。5~11は須恵器で、5は口径16.4cmを測る無返しの壺蓋、6・7は高台付杯で、口径14.5cm、13.6cm、器高4.2cm、3.7cm、底径9.9cm、11.4cmを測る。8は高杯、9は小壺、10は甌、11は壺か。12~25は土師器で、12は高杯、13は杯、14~21は甌(20など移動式甌の把手を含む)、25は多足土器の脚。26・

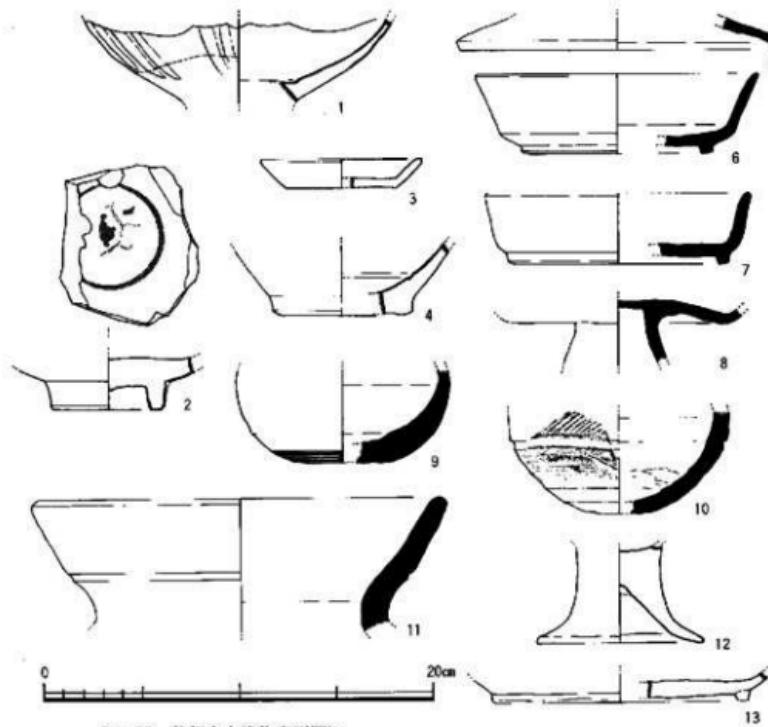


Fig. 57 谷部出土遺物実測図(1)

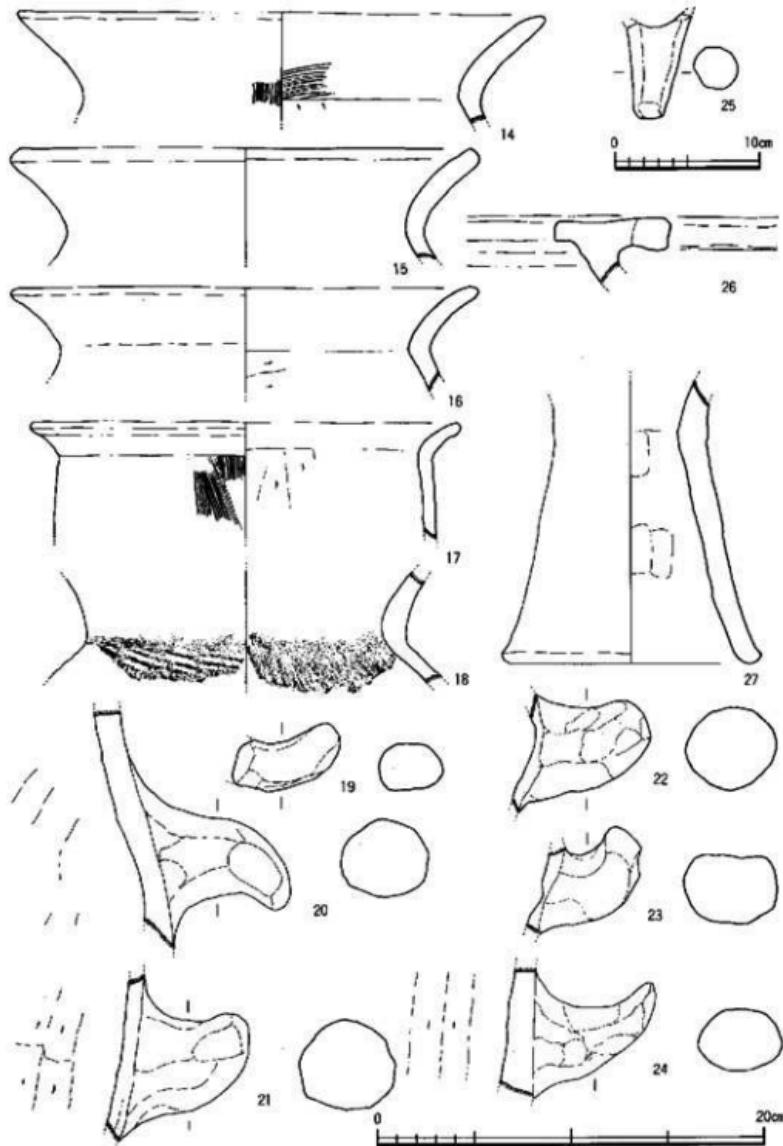


Fig. 58 谷部出土遺物実測図(2)

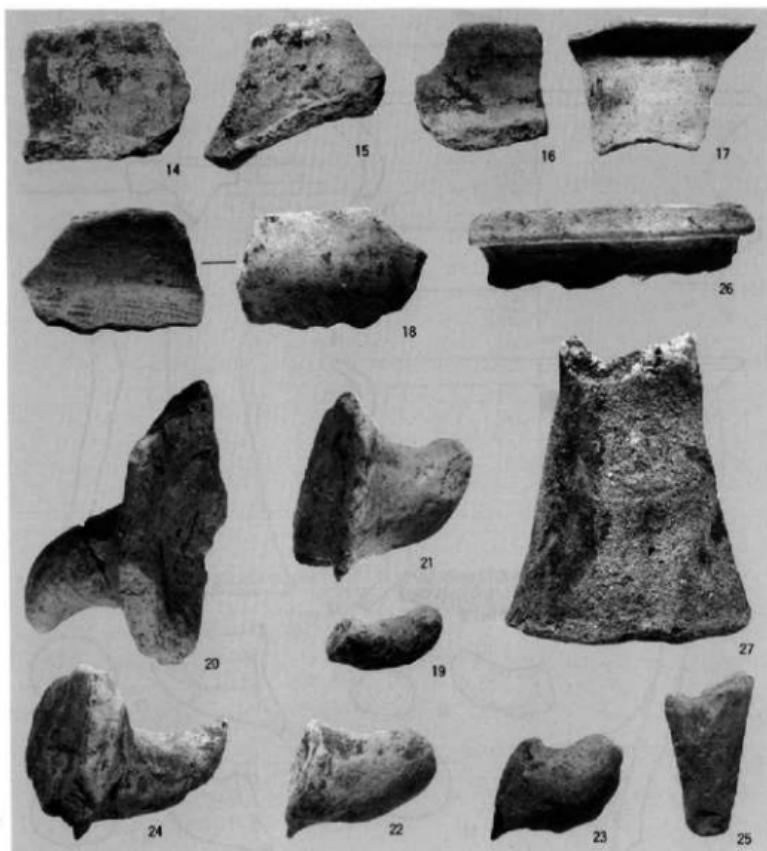


Fig. 59 谷部出土遺物(2)

27は弥生土器で、26は甕、27は器台である。

以上から、谷部は用水と考えられ、出土遺物から奈良時代に掘削され中世の後半まで使用されたものといえよう。

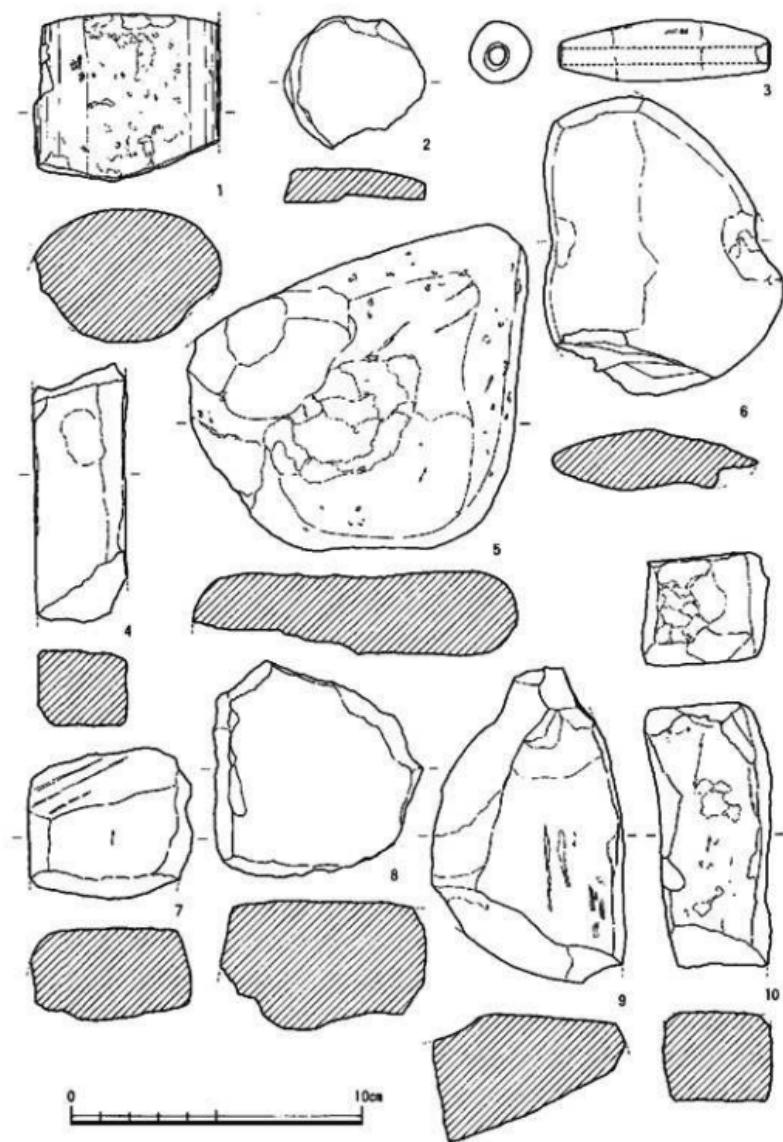


Fig. 60 出土石製品・上: 製品実測図(1)

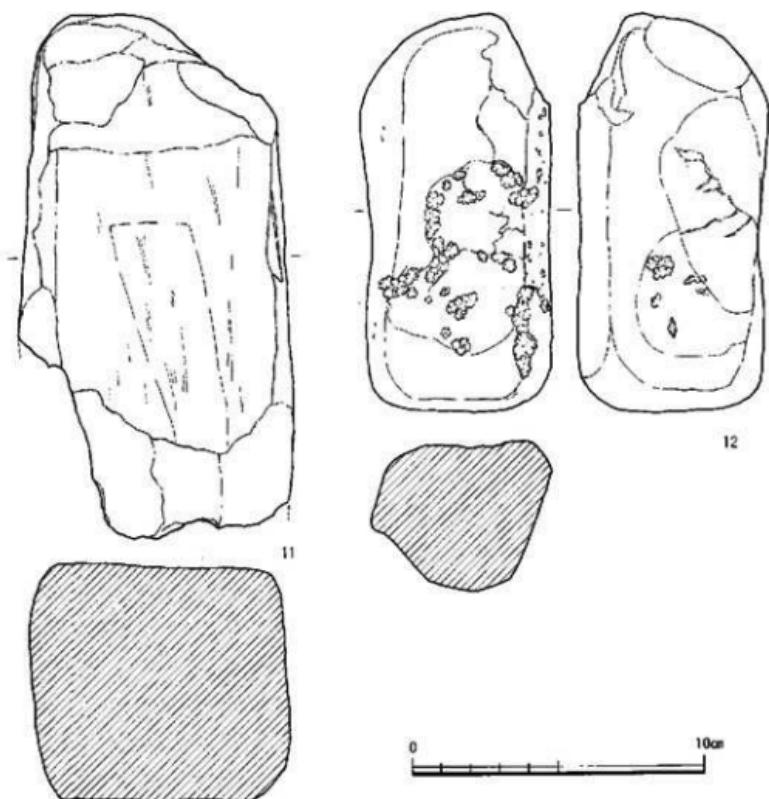


Fig. 61 出土石製品実測図(2)

出土石器・土製品 (Fig. 60~62)

1は太形蛤刃石斧片、2~4は土製品で、2は17.8gの円盤、3は土鍤、4は棒状をなしている。6は215gの石鍤、7~11は砥石、5・12は礎石。5・7・8・12は第7分上層、10・11は第10号井戸出土で、遺離した遺物とはいえないだろう。

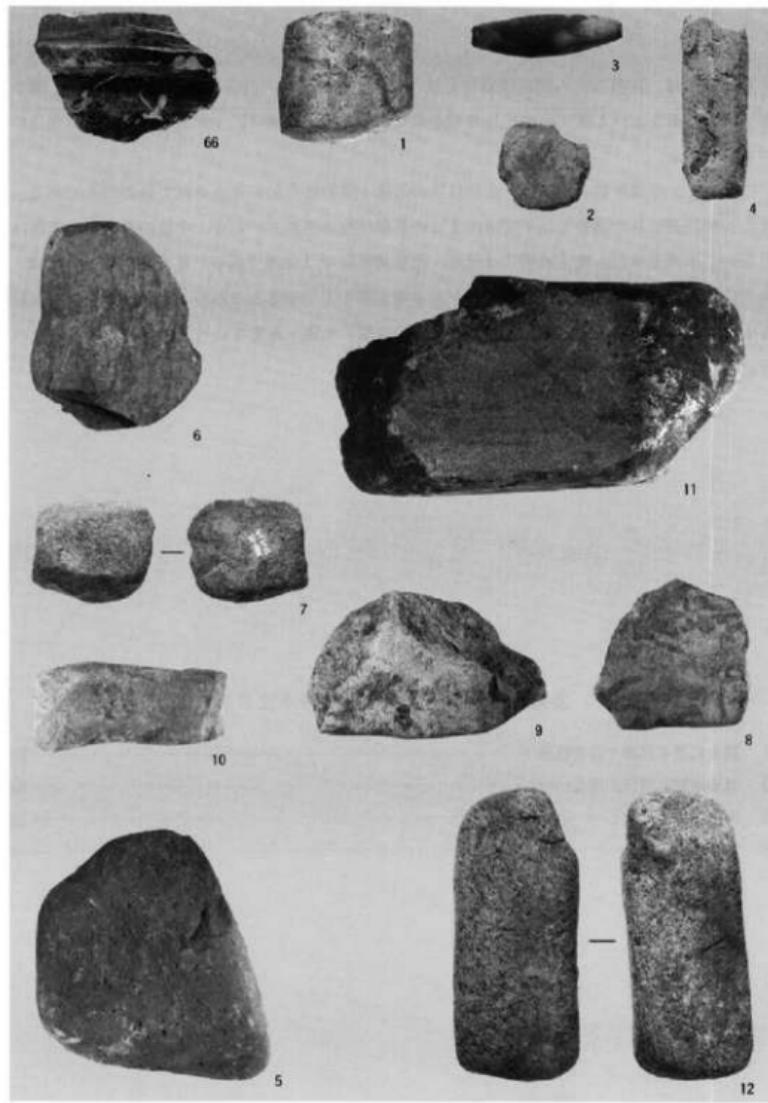


Fig. 62 出土土製品・石製品

III おわりに

本調査では、古墳時代の掘立柱建物 2 棟と柱穴、奈良時代の井戸 1 基（第30号井戸）、溝 2 条（第 5 号溝など）と柱穴が古代までの遺構である。他の遺構は、中世後半から近世にかけてのものである。

これまで比恵遺跡群の調査は、古代以降の遺構・遺物は点的に検出されているのみである。また、那珂遺跡群の調査では平安時代までの遺構は検出されているが、中世の遺構の検出例は少ない。本調査検出の地下式横穴は那珂・比恵遺跡群では初例である。第30号井戸の検出は、那珂・比恵遺跡群での古代の集落の広がりを考えるうえで参考となろう。また、本調査における中世後半以降の用水・上樋・墓地の検出も同時期の集落を推考するうえで今後の参考となろう。

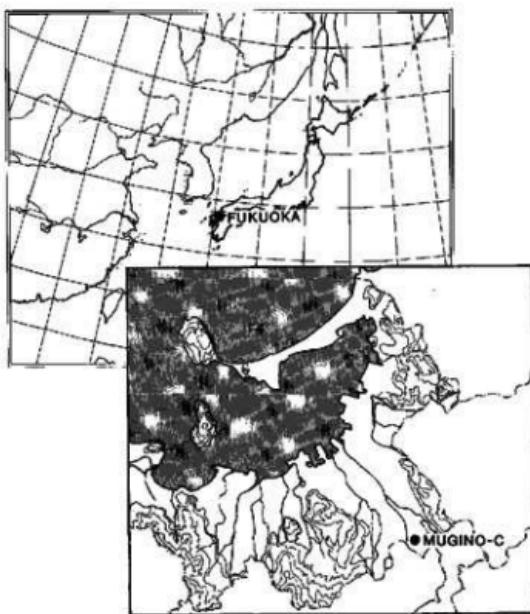
麦野 C 遺跡群第 1 次調査報告本文目次

I 調査に至る経緯と調査経過	53
II 周辺遺跡と既往の調査	54
III 検出遺構と遺物	58
IV まとめ	70

MUGI NO

麦野C遺跡群

—第1次調査の概要—



調査略号 MGC-1

調査番号 8949

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が実施した麦野C遺跡第1次調査の概要である。
2. 本書に掲載した遺構の実測図は小畠、川上洋一、中村啓太郎、木島みどりが作成し、遺物の実測図の作成および写真撮影、製図は小畠が行った。
3. 本書の執筆・編集は小畠が行った。
4. 本書に収録した記録類および出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターに保管収蔵される予定である。

遺跡名	麦野C遺跡群	調査次数	1次	遺跡略号	MGC-1
調査番号	8949	分布地図番号	021-A-4		
調査地籍	福岡市博多区麦野6丁目11-4				
調査原因	ビル建設	開発面積	895m ²	調査面積	633m ²
調査期間	1989年10月11日～1989年11月18日	調査担当者	小畠 弘己		
調査後の処理	調査後破壊	出土遺物量	コンテナ12箱		
検出遺構	豊穴住居跡23基、堅穴1基、土壙6基、溝1条、柱穴多数。 いずれも奈良時代8世紀中頃から9世紀初頭に属すると考えられる。				
出土遺物	旧石器時代：使用痕・加工のある石刃（黒曜石・サスカイト）2点、剥片（黒曜石）1点 弥生時代前期後半：土器片4点、貝岩製偏平片刃石斧1点 古墳時代後期：須恵器壺3点				
	奈良時代：須恵器各種容器多数、土器器各種容器多数、鐵錆1点、鐵斧1点、不明鉄製品1点、砥石4点、瓦2点、土鍤1点、石製紡錘車1点				

第1表 調査概要表



第1図 遺跡の位置と主要道路（奈良～平安時代）(1/125,000)

I 調査に至る経緯と調査経過

1. 調査の経緯

さる1989年6月9日、藤正憲氏より、福岡市博多区麦野6丁目11-4地内においてマンション建設の計画があり、当該地における埋蔵文化財の有無の照会があった。これを受け埋蔵文化財課では、当地が麦野C遺跡群に入り埋蔵文化財の包蔵地にあたるため、試掘調査が必要である旨を、申請者に告げた。両者協議の上、家屋の解体を待って、1989年6月29日に試掘調査を実施した。この結果、濃密な遺構分布が認められ、当地が奈良時代の集落跡の可能性があることが判明した。建設にあたっては、事前の調査が必要なため、1998年10月より調査を開始することとなった。調査は工種の調整がつかず、杭打ち後に実施されている。

(調査体制)

調査依託 藤正憲

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎（前）

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝（前） 埋蔵文化財第一係長 折尾学（前）

調査事務 松延好文

調査担当 小畠弘己

調査作業 青木佐智子、出雲義住、上野龍男、内山和子、奥田弘子、木島みどり、久良木シズエ、大長正弘、高浜栄一、出中ひろみ、徳永静雄、仲上文子、中村啓太郎、中道秀雄、浜地富男、広田熊雄、深川昌弥、福澤山次郎、船越恒人、別府俊美、三浦力、村上エミカ、村上エミ子、吉住作美、脇坂レイコ

整理作業 今村淳子

調査期間中には、各種条件整備にあたり株式会社セイブコミュニティの大内田準助氏にお世話をいただきました。御礼申し上げます。

2. 調査経過

1989年10月11日 機械力にて表土剥ぎ開始。一部の住居跡を掘り始める。

10月25日 I区遺構ほぼ検出。II区遺構調査開始。

11月14日 全体写真撮影。遺構実測。

11月17日 旧石器包含層確認調査開始。

11月18日 調査完了。

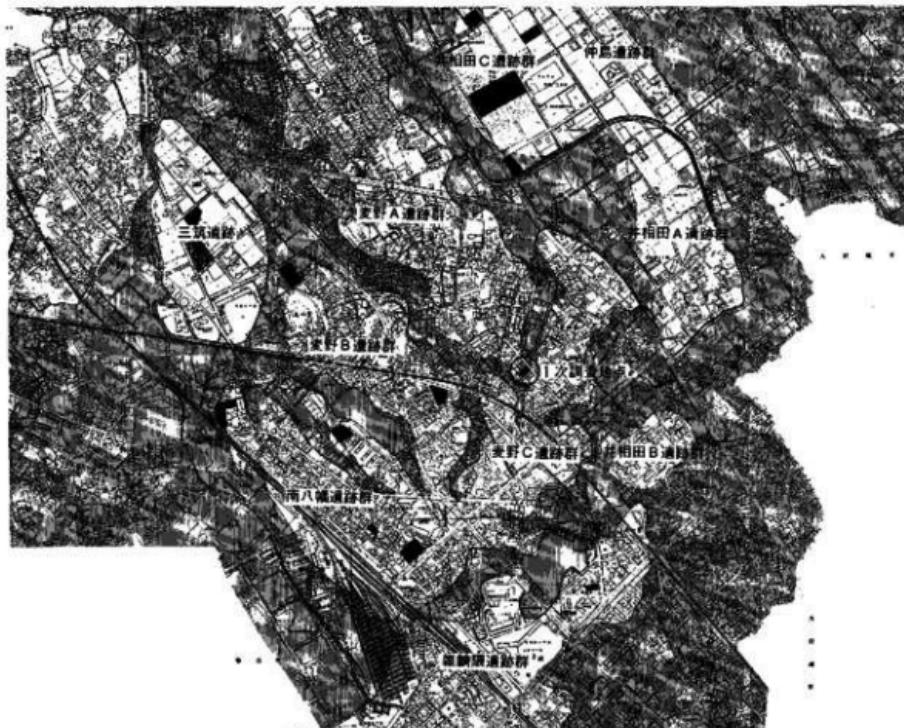
11月22日 埋め戻し完了。

II 周辺遺跡と既往の調査

1. 遺跡の立地と周辺遺跡

麦野C遺跡群は福岡平野南部の丘陵地帯にあり、東を大野城市、西を春日市に挟まれた行政上の最深部にあたる。奈良時代を中心に周辺の遺跡を挙げると、遺跡東側の水田地帯に8~9世紀の集落跡である井相田C遺跡、仲島遺跡群、台地の北側に8世紀中頃に創建されたと考えられる高畠廃寺などがある（第1図）。

麦野C遺跡群の立地する台地は更新世の台地であり、沖積面に埋没したり、侵食で谷や池を掘り、現地形では南北1.5km、東西1kmほどの八手状を呈する。この台地上は、その谷によって遮られた地形的な縦まりごとに、南八幡遺跡群、麦野A遺跡群、麦野B遺跡群、麦野C遺跡群に分けられている（第2図）。



第2図 麦野遺跡群の位置詳細図 (1/16,000)

これまでに、南八幡遺跡群で4次、麦野A遺跡群で4次、麦野B遺跡群で2次、麦野C遺跡群で1次の調査が実施されている。これによると、とくに8世紀から9世紀を中心とした集落がこの八手状の台地上に広く分布しており、その全容はいまだ不明であるが、かなりの規模で展開することが予想される。今回の調査もその一部を明らかにしたにすぎない。

2. 基本層序と遺構の分布

調査地点の地形は現時点では、標高16.5~16.3mあまりの緩やかな東方向への斜面にあたる。地表除去後の旧地形では、調査区の中央を境として、北東方向と南西方向へと傾斜する台地の尾根部分に相当する。巨視的にみれば、麦野C遺跡群と麦野A遺跡群を繋ぐ回廊部にあたり、北東方向と南西方向から谷が入る。最頂部で標高16.2m、北東端で15.2m、南東端で15.6mである。これによると北東部への傾斜が急激である。

遺構はこの頂部には無く、両端の傾斜面に分布している。堅穴住居跡の数でいえば、遺構の密度は傾斜の緩い南西斜面の方が密である。この頂部は尾根道であった可能性が高い。

この遺構を検出した面は、基本層序の第5層上面にあたる。基本層序は上から第1層：表土、第2層：淡茶褐色土、第3層：暗茶褐色土、第4層：黒色土、第5層：黄色土、第6層：黄灰色粘質土である（第3図）。この第5層は高所に行くに従い赤色を増していることから、鳥栖ローム層およびその上部のレス層と考えられる。第6層は八女粘土層である。第5層を覆う第4層はガラス質に富むサラサラした質感をもつ土層である。この層は台地の斜面部を中心に堆積しており、火山性の噴出物を包含する可能性もある。今後の分析が期待されよう。遺構はすべてこの層の上部から掘り込まれていた。

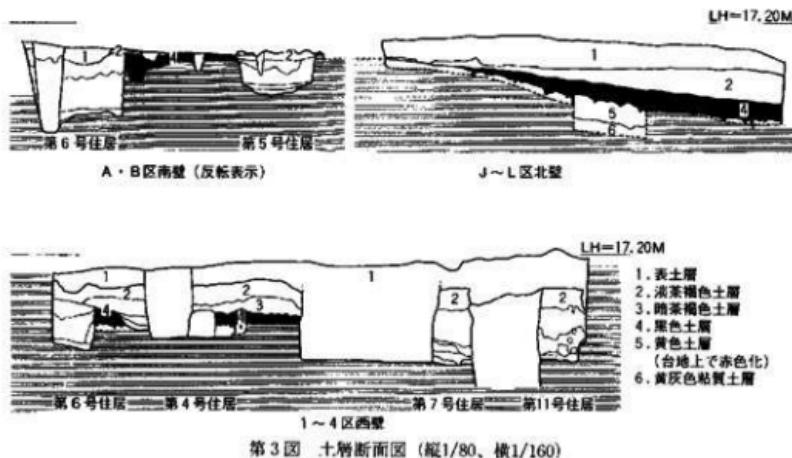




写真1 調査開始のようす(南から)



写真2 第7・8・11・12・13号住居跡(南西から)

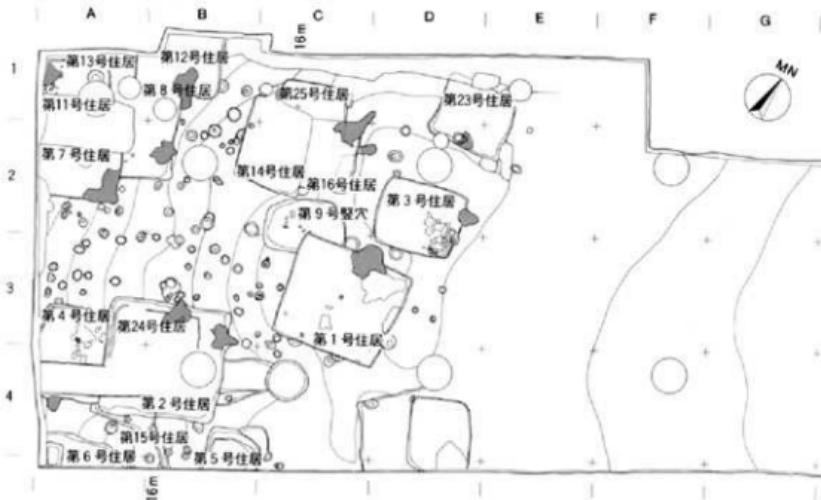


写真3 第2・4・15・24号住居跡(南東から)



写真4 調査区全景(南西から)

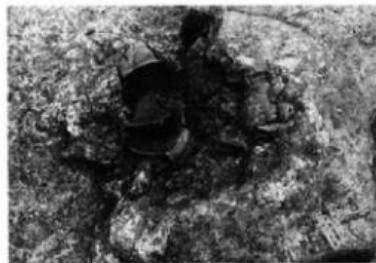
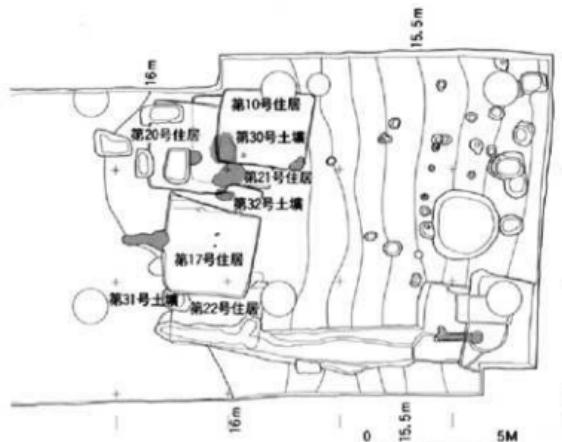


写真5 第1号住居跡(東から)



写真6 第10・20・21号住居跡(南西から)

H | I | J | K | L |



第4図 調査区全体図 (1/200)

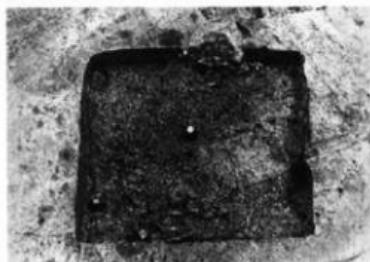


写真7 第1号住居跡(南から)

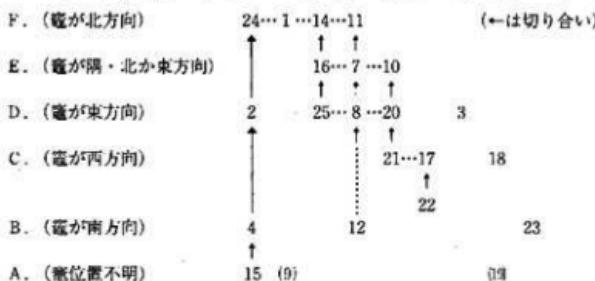


写真8 II区全景(南東から)

III 検出遺構と遺物

1. 検出遺構

今回の調査では、23基の竪穴住居跡、1基の竪穴、6基の土壙と多数の柱穴を検出した。そのほとんどが奈良時代を中心とした時期のものである。柱穴群は建物として把握することはできなかった。竪穴住居跡は切り合いや竪の位置や方向から、以下のように整理できた。



以上より、住居の切り合いは少なくとも4回あり、5段階に分けることができる。しかし、異方向の竪をもつ住居が併存する場合を考えると、3・4段階に収まりそうである。実際、出土遺物を検討すると、不明なE段階を除いて、すべて牛頭窓跡群のⅣ期に属する。竪の構造は、いわゆる突出型である。しかし、南八幡遺跡で確認されたような竪のある壁に作り出された張り出し（棚）は確認できなかった。これと関連して、長い煙道をもつ竪は東西方向の壁に設置された住居群（C・D段階）がほとんどで、これらにはこのような棚が付けられていた可能性もある。これらは、検出状況の違いによるみせかけの偶然によるものではなく、煙道の角度や長さなどに他の段階のものと明らかな構造上の違いがあったことを物語るものである。また、新しいタイプとして、住居のコーナー部分に竪を掘り付けるタイプがE段階に3基認められた。また住居の構造は方形の竪穴であるが、住居内の柱の痕跡は認められなかった。側壁溝はわずかに2基の住居で検出したにすぎない。

2. 出土遺物

出土遺物は、ほぼ8世紀後半から9世紀初頭の須恵器や土師器を中心とした各種容器や煮沸具や移動式の竪、これに伴う鉄器や砥石などが主体を占めている（第10・11図、第2・3表参照）。これ以外には、包含層から同安窯系青磁碗の破片が、第12・18号住居跡から6世紀後半

遺構番号	検出グリット	形狀・規模・遺物の出土状況	その他の出土遺物
第1号堅穴住居跡	C-D-3区	方形4.14×3.76m。深さ45cm。主軸は南北方向。長辺のはば中央に竈をもつ。柱穴はない。庭方の一部に簡便窓が認められた。竈内部に竈の廃棄時に捨てられたと思われる土器器形土器（第10回17-18）と須恵器片（第10回1）が、竈の床面から須恵器环蓋（第10回2）と上飾器環（第10回13）が出土した。	須恵器高台付环・环・彫形土器、上飾器環・鉢形土器、砥石
第2号堅穴住居跡	A-B-2+3区	方形4.24×4.32m。深さ60cm。主軸は東西方向。窓辺のやや左寄りに竈をもつ。柱穴はない。第24号住居跡に切られる。竈の廻間に土器片（第10回14）や須恵器高台付环（第10回11）の破片などが出土。	須恵器环蓋・彫形土器、土器器高台付环・环・高环・彫形土器、瓶
第3号堅穴住居跡	D-2+3区	長方形3.06×2.54m。深さ20cm。主軸は東西方向。短辺の左寄りのところと、右寄りの2箇所に竈をもつ。この第2竈から東南隅にかけては施墻跡と思われる白色的粘土の杭が認められた。住居外への張り出しはわずかである。柱穴はない。竈の廻間に中心として上面窓の彫形土器などが出土した。	土師器高台付环・环・鉢・瓶
第4号堅穴住居跡	A-3+4区	方形3.34×?m。深さ25cm。主軸は南北方向。短辺の右寄りに竈の痕跡の赤く剥げた床面があった。その東寄りは第2号住居跡に切られ、西角は南北区外へ延びるため全体形は不明。柱穴はない。	須恵器环蓋・高台付环・彫形土器、土師器高台付环（第10回15）・彫形土器・瓶・環
第5号堅穴住居跡	B-4+5区	長方形3.12×?m。深さ50cm。主軸は南北方向。全軸の約半分が南北区外へ延びる。竈の位置は不明。柱穴はない。	須恵器环・土師器环・彫形土器
第6号堅穴住居跡	A-4+5区	全体形不明。南北角を検出。大半は調査区外へ延びる。検出部分には竈は存在しない。深さ80cm。	
第7号堅穴住居跡	A-2区	方形と考えられるが、擾亂により全体の大きさは不明。深さ12cm。第7号住居跡を切る。主軸は東西方向。南東隅に竈がある。竈の北西部の往辺の中央付近に須恵器片などの幾枚や木炭の集めた廻する所がある。竈付近から須恵器環（第10回8）が出土した。	須恵器長瓶、土師器环蓋・高环・彫形土器、瓶・鉢・瓶状土器
第8号堅穴住居跡	A+B-1+2区	方形3.22×?m。深さ40cm。第12号住居跡の竈を切る。主軸は東西方向。竈は東側の邊の南寄りに位置している。竈西側の床面から須恵器高台付环（第10回9）と須縫（第11回23）、竈北側の床面からは瓶が出土した。竈に接して須恵器环蓋（第10回4）が出土した。	
第10号堅穴住居跡	I-J-2区	長方形3.30×2.74m。深さ10cm。主軸は東西方向。南北間に竈の痕跡が認められる。第21号住居跡を切る。	須恵器环蓋・高台付环・环、土師器环蓋・高台付环・环・彫形土器・瓶・滑石器蓋錐中（第11回26）
第11号堅穴住居跡	A-1区	調査区の北内隅に位置する。擾乱のため全体形は不明。深さ20cm。竈の裏付近とその底面に焼土、木炭、白色粘土、上器片の集中箇所が認められ、この北側辺に竈が設けられていたことが判る。よって、この住居の主軸は南北方向である。	須恵器环・环、土師器环蓋・高台付环・彫形土器・瓶
第12号堅穴住居跡	A-B-1区	方形3.04×?m。深さ30cm。主軸は南北方向。南辺の中央に竈がある。竈内より土器片（第11回20）と鉢形土器（第11回19）が出土した。	須恵器环・环・环身（N.a）・彫形土器、土師器环蓋・高台付环（第10回16）・彫形土器
第13号堅穴住居跡	A-1区	規模・形狀ともに不明。第11・12号住居跡に切られる。	須恵器环蓋・高台付环・上部器彫形土器
第14号堅穴住居跡	B-C-I+2区	長方形3.08×2.42m。深さ25cm。主軸は南北方向。第16・23号住居跡との3基の住居が並ぶ中で最も新しいものである。北辺の内より竈が設けられている。竈内からは土器片の彫形土器片が出土した。住居内床面より西壁に接して須恵器环蓋（第10回5）が、南側で鉄製の手斧（第11回24）が出土した。	須恵器高台付环・彫形土器、上部器高台付环・环・彫形土器・瓶（一部、第16号住居跡の遺物と重複）

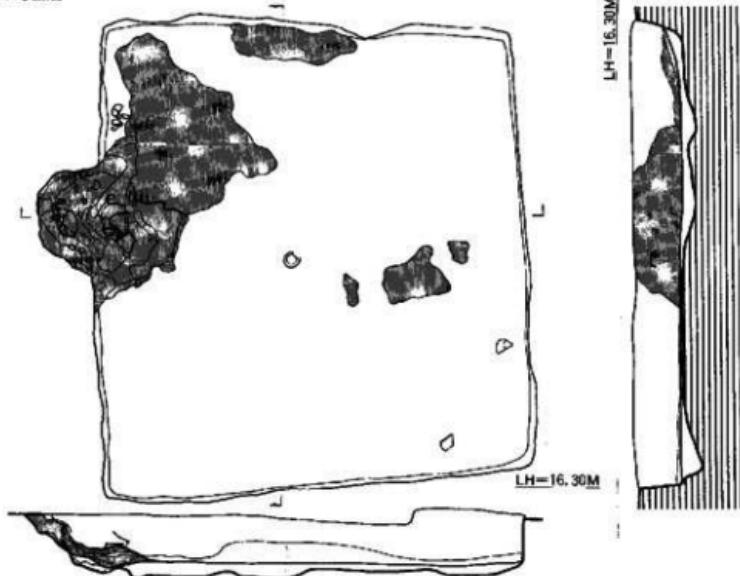
第2表 主な遺構と出土遺物の概要表(1)

遺構番号	検出グリッド	形状・規模・遺物の出土状況	その他の出土遺物
第15号堅穴住居跡 A・B-4区		2.32×?m、深さ15cmの堅穴で、第2・4号住居跡と異なるため全体形や屢縫は不明。主軸は南北方向と考えられる。	須恵器壺蓋、土師器夷形土器
第16号堅穴住居跡 B・C-1・2区		長方形3.24×2.64m、深さ35cm。主軸は東西方向。北東隅に長い煙道をもつ竈が設けられている。竈の周囲から土師器の壺形上器片などが出土した。	須恵器壺蓋、高台付环、土師器壺、壺形土器、弥生前期末壺形土器、壺形土器
第17号堅穴住居跡 I・J-3-4区		方形3.30×3.40、深さ20cm。主軸は東西方向。西邊の中央に長い煙道部をもつ竈がある。竈内より土師器片などが出土した。	須恵器壺蓋、小形帯巻(第10回6)、高台付环、环、土師器壺蓋、高台付环、环、壺形土器、壺、砾石
第18号堅穴住居跡 L-4区		方形3.30×?m、深さ50cm。主軸は東西方向。西邊の南よりに煙道部を残す竈がある。	須恵器壺蓋、高台付环、环、环身(IVa)、壺形土器、上部環状壺蓋、高台付环、环、壺形土器、壺、砾石、布目平瓦、土頭、砾石
第19号堅穴住居跡 K-4区		第18号住居や後世の溝に切られ、全体形・規範とともに不明。北西コーナー部が残るのみである。深さ30cm。	
第20号堅穴住居跡 I・J-2-3区		方形3.20×2.98m、深さ15cm。主軸は東西方向。東辺の南寄りのところに長い煙道部をもつ竈がある。竈左側面に丸瓦(第11回21)や土師器の壺や偏平な瓦石があった。3辺の壁で塗抹が確認できた。	
第21号堅穴住居跡 I・J-2-3区		方形3.08×2.96m、深さ13cm。主軸は東西方向。第10・20号住居に切られ、北西と南東のコーナーが残る。西邊の南寄りの所に並けた面があり、竈の焚き口と考えられる。	須恵器壺蓋(第10回10)、土師器夷形土器
第22号堅穴住居跡 I・J-4区		方形3.24×?m、深さ10cm。第17号住居や後世の溝に切られ、全体形・規範とともに不明。	須恵器壺蓋、土師器壺蓋、壺形土器
第23号堅穴住居跡 D・E-1・2区		長方形3.62×2.32m、深さ16cm。主軸は南北方向。南辺中央に白色粘土と赤土の縁が認められたが、明確な竈の痕跡は認められなかった。	須恵器壺蓋、高台付环、壺形土器、土師器夷形土器
第24号堅穴住居跡 A・B-3-4区		方形3.10×3.12m、深さ70cm。主軸は南北方向。北辺の東寄りに竈が設けられている。竈は袖をよく残し、その左側から須恵器壺蓋(第10回3)が出土した。	不明鉄製品(第11回25)
第 9 分 堅 穴 C-2-3区		2.90×1.92m、深さ27cmの隅丸長方形の土塙である。第1号住居跡(11/43)と表面被覆されている。	
第 30 号 土 塙 I・J-2 区		1.41×0.85m、深さ33cmの隅丸長方形。第20号住居の竈の跡がある。堆積層の上部から土師器の壺形土器片などが出土した。竈設置以前の穴と考えられる。	
第 31 号 土 塙 I-4 区		1.06×0.80m、深さ92cmの隅丸長方形。黄褐色土や黒茶褐色土などが層状に堆積していた。内部より、須恵器の高台付环一部体分(第10回12)が半埋された状態で出土した。竈洞に伴うものか。	
第 32 号 土 塙 I・J-3 区		0.70×0.38m、深さ46cmの隅丸長方形。土塙を含む執十署や黄褐色土層が層状に堆積していた。竈設置に伴うものか。	

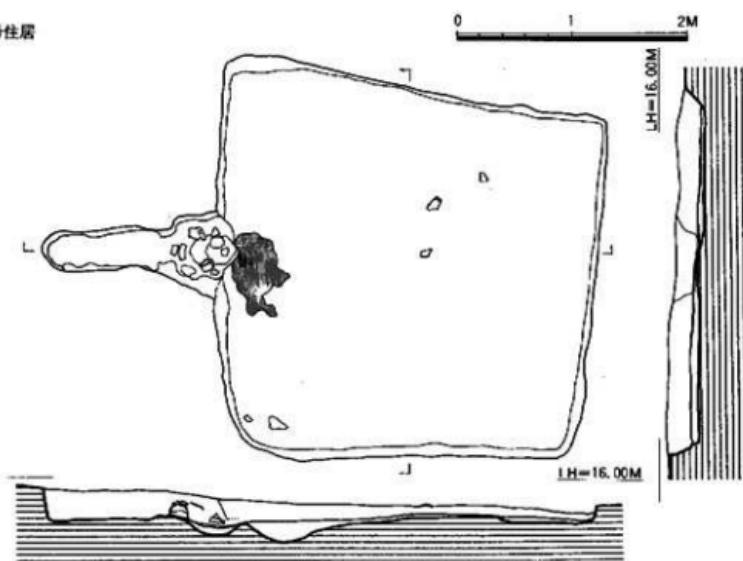
第3表 主な遺構と出土遺物の概要表(2)

から7世紀初頭の須恵器壺身の破片が、16号住居跡から弥生時代前期末と思われる土器片が、第12号住居跡から弥生時代の質岩製の偏平片刃石斧(第12回27)が、第3・8号住居跡とI区の遺構検出面から旧石器時代の使用痕のある剣片(第12回29)、加工痕のある石刀(第12回30)、使用痕のある切断石刀(第12回28)などが出土している。

第1号住居

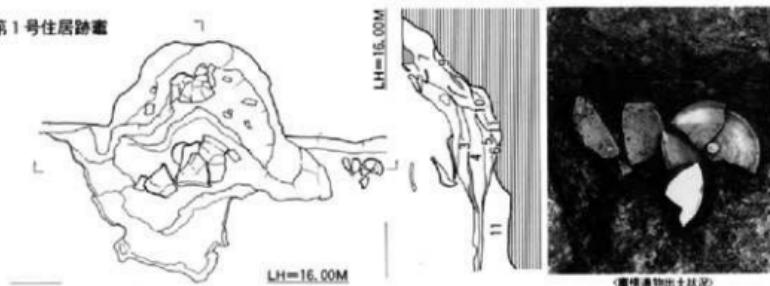


第17号住居



第5図 第1・17号住居実測図 (1/50)

第1号住居跡図



(遺物出土状況)

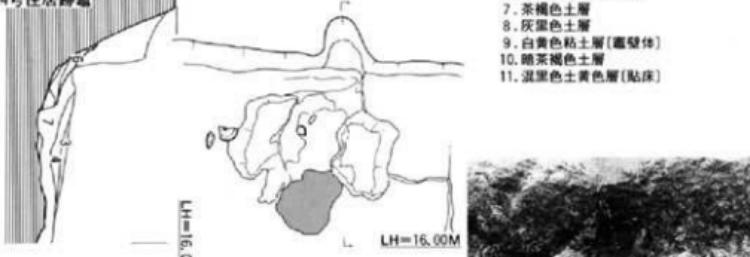
第14号住居跡図



(第1号住居跡)

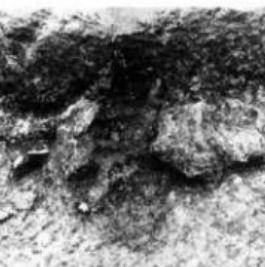
1. 白色粘土層(赤褐色粘土塊含む)
2. 淡茶褐色土層
3. 明茶褐色混白色粘土層
4. 茶褐色土層(木炭・赤褐色粘土塊含む)
5. 淡褐色粘土と灰層(竈使用時の層)
6. 灰層(竈使用時の層)
7. 茶褐色土層
8. 灰黑色土層
9. 白黄色粘土層(竈壁体)
10. 暗茶褐色土層
11. 混褐色土黄色層[粘床]

第24号住居跡図



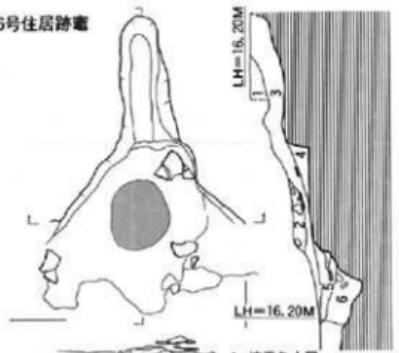
1. 白色粘土層
2. 白黄色粘土層
3. 暗赤褐色混木炭土層
4. 暗黒色混灰土層
5. 4層に同じ(やや薄い色調)
6. 白黄色粘土層(竈壁体)
7. 暗黒色混黄色土層(粘床)
8. 黄色土層

第6図 蔵実測図・写真(1)



(第24号住居跡)

第16号住居跡

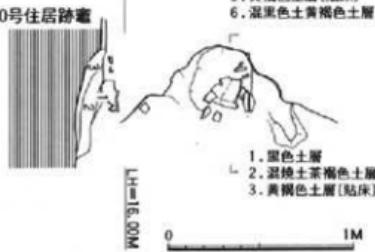


1. 淡黑色土層
2. 赤黑色土層
3. 暗黑色土層(白色粘土・赤色土含む)
4. 暗黃褐色土層
5. 黃褐色土層[粘床]
6. 混黑色土黃褐色土層[粘床]



(第16号住居跡)

第10号住居跡



1. 黑色土層
2. 混燒土黃褐色土層
3. 黃褐色土層[粘床]



(第10号住居跡)

第7号住居跡



1. 混白色粘土暗褐色土層
2. 暗褐色土層
3. 白褐色粘土層
4. 黑色木炭層
5. 混燒土暗褐色土層
6. 黑色木炭層[底面]
7. 混黑色土黃褐色土層[粘床]
8. 白茶褐色粘土層



(第7号住居跡)

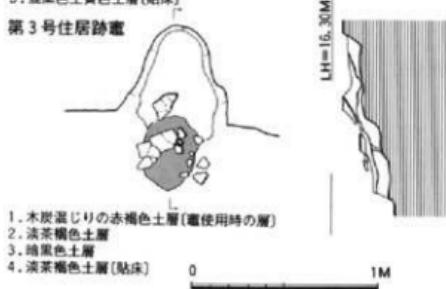
第7圖 電窓測図・写真(2)

第2号住居跡図



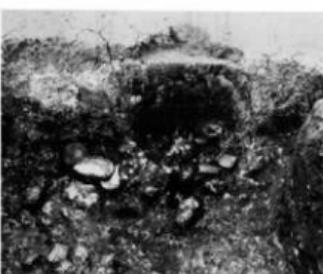
1. 白色粘土塊を含む暗黒色土層
2. 白色粘土層
3. 黄褐色土層
4. 深木炭暗茶褐色土層(窓使用時の層?)
5. 深黒色土黄色土層(粘床)

第3号住居跡図

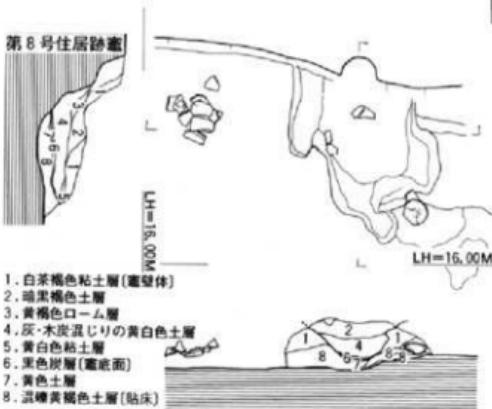


1. 木炭混じりの赤褐色土層(窓使用時の層)
2. 淡茶褐色土層
3. 暗黒色土層
4. 淡茶褐色土層(粘床)

(第2号住居跡)

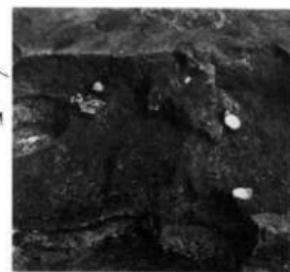


第8号住居跡図



1. 白茶褐色粘土層(窓壁体)
2. 暗黒褐色土層
3. 黄褐色ローム層
4. 反・木炭混じりの黄白色土層
5. 青白色粘土層
6. 黒色炭層(窓底面)
7. 黄色土層
8. 深暗茶褐色土層(粘床)

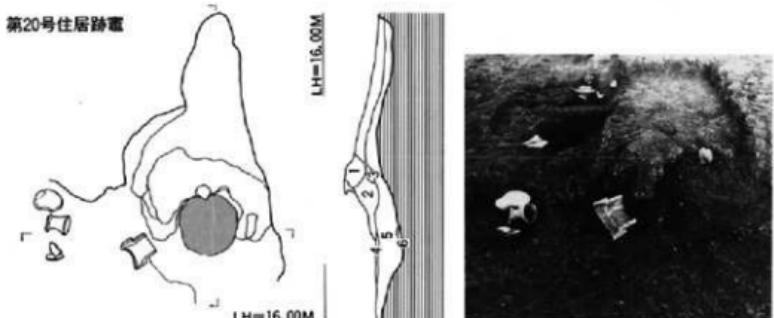
(第3号住居跡)



(第8号住居跡)

第8図 窟実測図・写真(3)

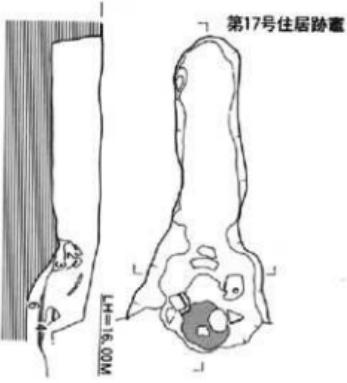
第20号住居跡図



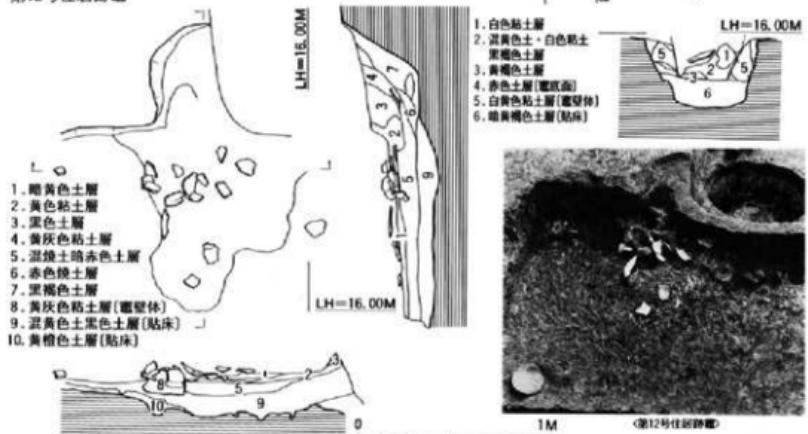
1. 雪茶褐色土層
2. 赤褐色燒土層
3. 混燒土茶褐色土層
4. 混燒土黑褐色土層
5. 雪茶褐色土層
6. 黑色土層
7. 灰黃色粘土層(竪壁体)

(第20号住居跡)

第17号住居跡圖



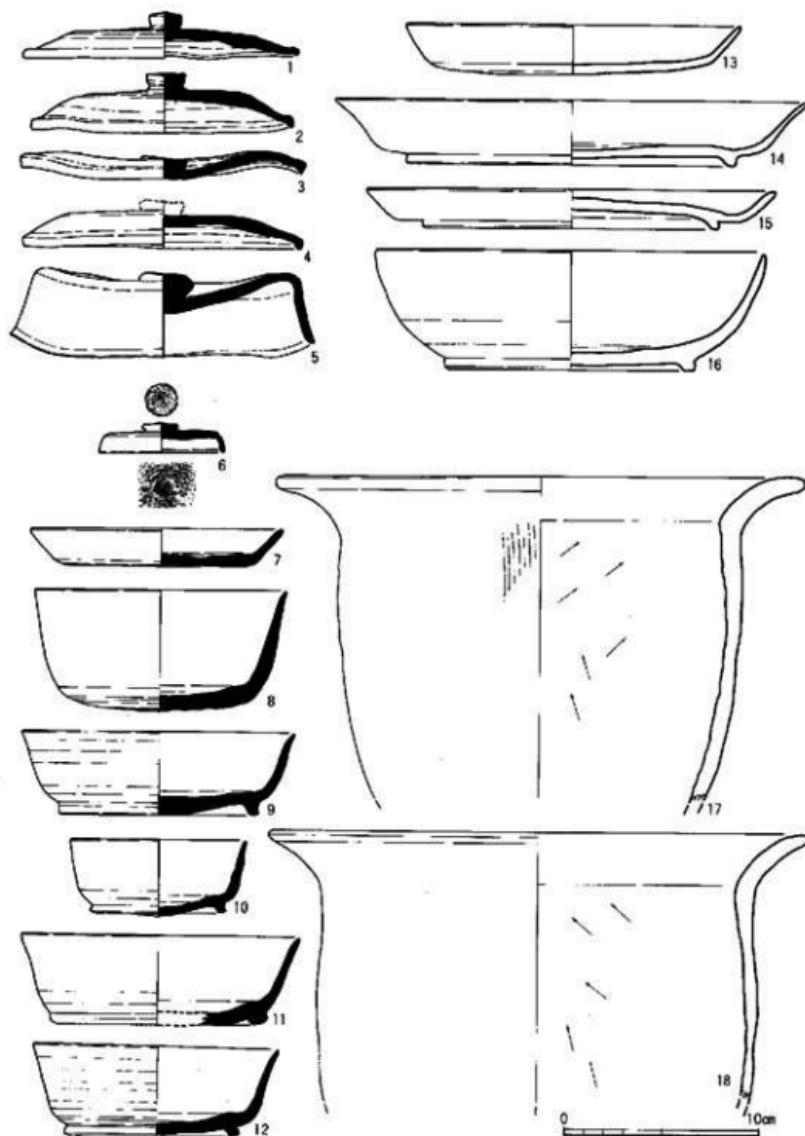
第12号住居跡圖



1. 灰黃色土層
2. 黃色粘土層
3. 黑色土層
4. 黄灰色粘土層
5. 混燒土暗赤色土層
6. 赤色燒土層
7. 黑褐色土層
8. 黄灰色粘土層(竪壁体)
9. 混燒土黑色土層(粘床)
10. 黃褐色土層(粘床)

1. 白色粘土層
2. 混黃色土・白色粘土
黑褐色土層
3. 黄褐色土層
4. 赤色土層(窓底面)
5. 白黃色粘土層(竪壁体)
6. 純黃褐色土層(粘床)

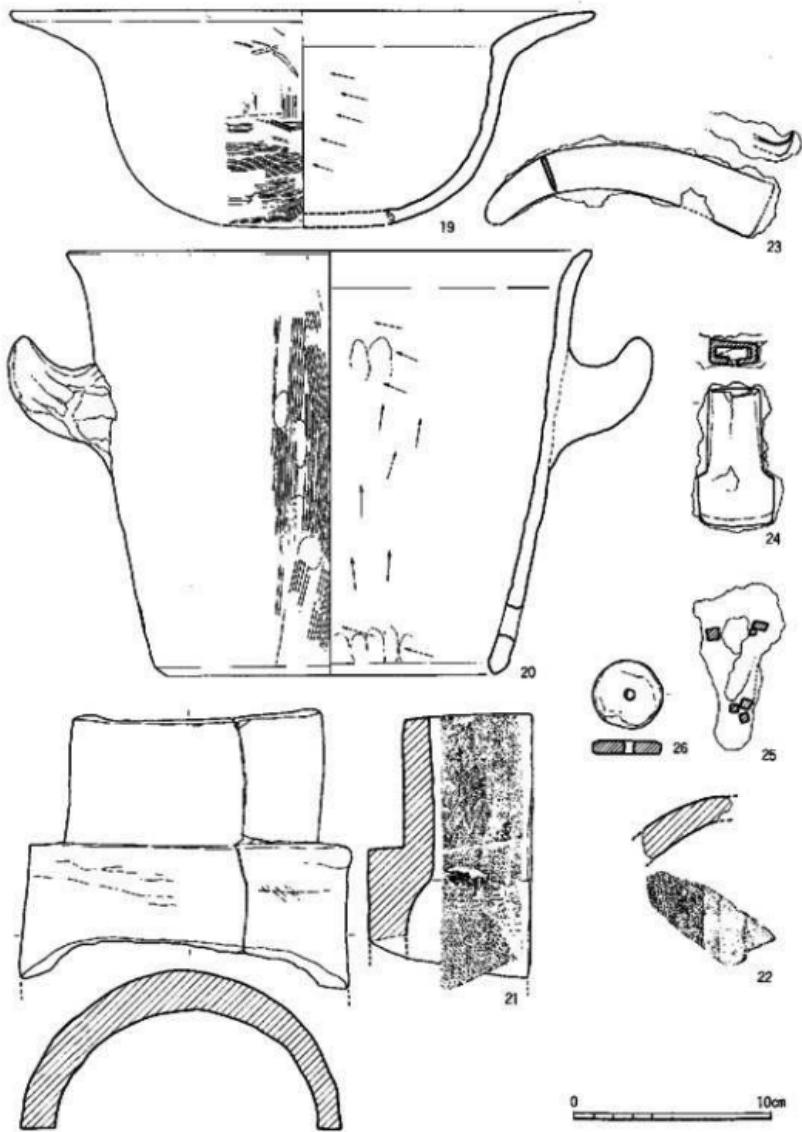
第9図 墓穴測図・写真(4)



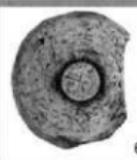
第10図 出土遺物実測図(1) (1/3)



写真9 出土遺物写真(1) (縮尺不同)



第11圖 出土遺物實測圖(2) (1/3)



6



17



19



20



18



27



26



28



29

30



21



22



24

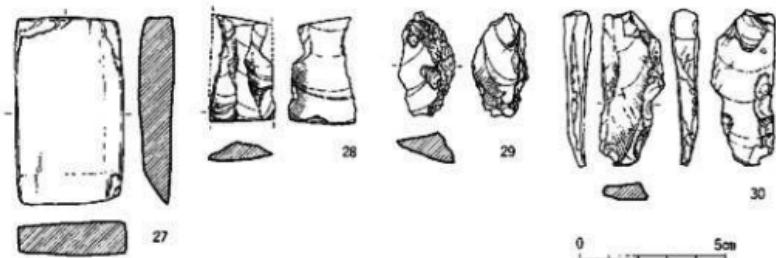


25



23

写真10 出土遺物写真(2) (縮尺不同)



第12図 出土遺物実測図(3) (1/2)

IV まとめ

今回の調査の成果としては、以下のことが挙げられる。

1. 8世紀後半から9世紀初頭の住居を中心とした集落を検出し、その立地の特徴を把握できた。
 2. この時期に4回前後の住居の建て替えが想定できた。
 3. 住居の建て替えは、竪の方向を異にして行われることが判明した。
 4. 該期の遺物を得ることができた。
 5. 集落の性格としては、磁器上器や祭祀に使用された特殊な遺物が存在しないこと、竪穴住居を中心に構成される集落であることなどから、一般の農村集落であったと考えられる。これは既往の調査結果を追認するものである。
 6. 造構は検出できなかったが、中世（12世紀後半）や古墳時代、弥生時代、旧石器時代の遺物を得ることができた。
 7. これにより、該期の造構や生活の痕跡が周辺に存在することが予測される。
- この委野遺跡群や南八幡遺跡群の立地する丘陵地帯では、これまで古墳時代後期と奈良時代を中心とした竪穴住居群が数多く検出されている。これに対して、弥生時代などの造構や遺物は皆無といつていいほどである。このような周辺の遺跡群と異なる特殊な状況は、一帯の本格的な開発時期が遅かったことを暗示させるものであるが、遺跡の調査自体もまだわずかな段階であり、今後新たな展開も予想される。遺跡群の性格の把握には、さらなる調査が必要とされよう。

中南部(3)

—那珂遺跡群第29次調査・麦野C遺跡群第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第361集

1994(平成6)年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8の1

印 刷 セントラル印刷株式会社